

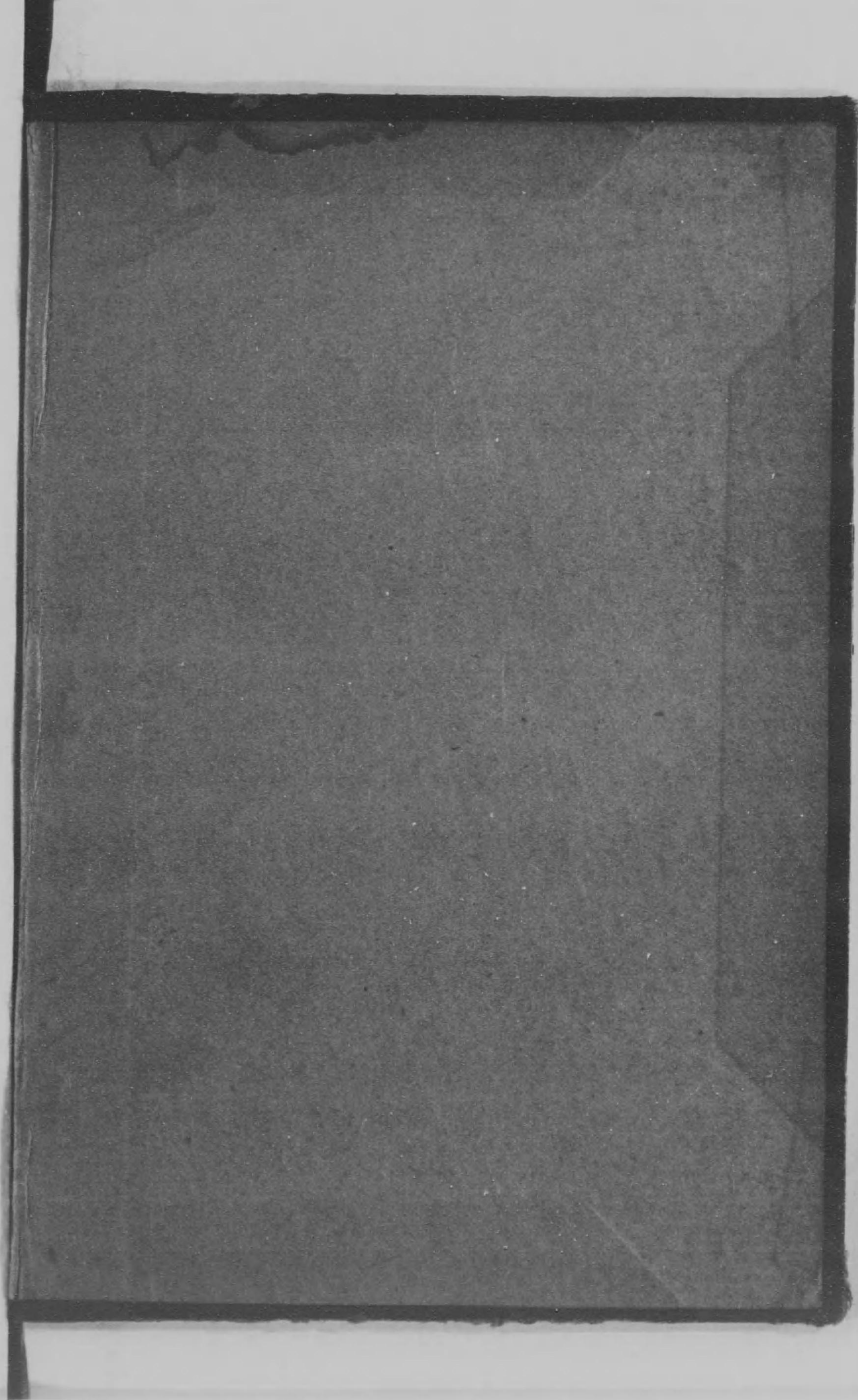
392
83



始



欠



欠

まあ坐われ

目次

主心の坐處………

一、藁人形も同様………

理窟通りに行かぬ——殺活の機——主心本分の坐處——七條九條の袈裟を掛けても——脚下が危い——本家郷に歸れ

二、主心は何處ぞ………

氣海丹田から二丁目——佛窟も窺ふを得ず——丹は單なり單一なり——生も無い死も無い——過去久遠劫から——即刻主心の活現成——眞の生命——決定心——金剛心——成功の秘訣——銀山鐵壁——萬里一條の鐵

三、主心を現すが禪………

主心を軍人から取り去らば——主心を政事家から取り去らば——主心を商人から取り去らば——

目次

大正
9. 3. 12
内交

392-83

大學の三綱領

一、冷暖自知す可き語

佛祖さ手を携へて阿々大笑——容易の看をなす勿れ——如何か這箇八字子中の字眼——明徳の明の字——本來の明——本覺——一念を生ずれば十萬八千里——口を開かんせば六十棒

二、己の行ひを顧みよ

上求菩提——下化衆生——間斷なく四弘の願輪に纏て——二乘聲聞の窟窟に陥る勿れ——言行一致が肝要——正念相續——修身齊家治國平天下——釋迦の苦行——達摩の西來——只管道行作麼生——一言に云ひば

三、天地位し萬物育す

君子胡ぞ慥々爾たらざる——佛教も儒教も二つは無い——皆な一樣に大道の人——偏するは大道の禁物——門より入るものは家珍に非ず——明徳——新民——至善——冷暖自知せよ——岸を隔て、越山多し——歸家穩坐底作麼生

歳頭の針

一、理地分上の活三昧

不増不減——不垢不淨——不新不古——不去不來——不受不施——宇宙天地の間に充塞す——不立文字教外別傳——法の眞唯中に寢起きしながら——衆生を迷はす種——欠伸一つでも——鼻息一つでも——閃電光——擊石火

二、禪は消化が第一義

迷中の所解——業因の造り通し——惡業の爲通し——理窟上の合點では——一切萬法みな動——地獄の数が減らぬ——煩惱作業の漢を覺醒せしめよ——眞箇の佛地——定慧等しく行じて

三、大智慧の面前にも

雪竇和尚——金鷄長老——藥病相治——那箇か是れ自己の端的——學海の波瀾一夜に乾く——大智慧にも三寸の闇——唐朝の裴相——黃檗禪師——裴相甚麼處にかある——煙を掴むに等し——隱元禪師——一條の白棒——日々是れ好日

白隠時代の精神を

一、恰も春夏二期の間に

春爛漫の花盛り——青々茂々の綠葉——妙心寺の孫末寺——松蔭の敗刹——四來の參徒を提撕

す——往來絡繹晝以て夜を續ぐ——其の堅い精神

二、相談悟り謎々禪のみ……………一六

提唱や接心の評判ばかり——抜けて終つた精神——今日の禪は秋冬の間——人間界は一寸先きが闇——歴史は時代を繰返す——覺束なき大法の再興

三、今日其精神が欲しい……………一七

傳心法要——大休正念禪師の跋——大戦の極——太平の極——最も仕末の悪い時——世界の形勢は朝變晩化——いざこ云ふ時に——生々とした宗旨——生々とした精神

爐頭閑話……………一九

一、座禪と入室を勵め……………一九

語黙動靜みな是れ座禪——併し乍らなア——坐れく——自ら根境并び忘す——打成一片——禪定——意志が鞏固になる

二、本も讀め詩も作れ……………二〇

次いで肝要なのは讀書——詩歌も作れ——納などの雲水中は——白隠さんも——眼の見える間はウンと讀め

三、吹き飛ばす歸天齋……………二二

大石正巳の宅で——河野廣中——箕浦勝人——田中舍身——奇術師の歸天齋正一——大層な法螺吹き——流石の政治家も吹き飛ばさる——歸天齋の宅に押寄せ

四、ゆきゝの人を其儘に……………二二

動中の靜——靜中の動——眞の禪定に入るこゝ難し——大燈國師——座禪せば四條五條の橋の上——座禪の妙諦——色即是空——空即是色——六祖大師の法寶壇經——須く熟讀玩味せよ

老爺の斧……………二五

一、工夫上慎むべきこと……………二五

今日の人の悪い癖——昔の人の學問の仕方——型ばかりの學問——禪門の修業者も亦た然り——機關——言詮——難透——無字の公案——隻手の聲——公案の型に左右さるな——師家も學人も覺醒せよ

二、源の釋迦佛を諦觀せよ……………二七

河の流れも遠くなれば——護法修法者の墮落——祖師の善智識のこ崇めたところで——心身の污垢を一洗せよ——釋迦佛さは何ぞ

三、達摩大師の傳法……………二八

一枝の葦——十萬里程の難——千萬無量の大慈悲——生粹の味が變つた——問屋から問屋へ
正傳の佛法——釋迦佛の足下に遇れ

四、世法と佛法……………二九

何んの因果ぞ——佛法の有難味——釋迦牟尼佛の出現は何の爲めぞ——佛法流布の謔——王法
と佛法と二なし——不可思議の妙法——國家擁護の任——大なる志を抱け——明德——新民——
至善——自覺々他覺行圓滿——我が一切の心身を打込んで

百丈と滄山の問答……………三四

滄仰宗の開祖——火ありや否や汝無しといふか——爐中に在る物ばかりが火では無い——夾ま
れるやうに左ばかり些少な物かしら——頭上漫々——脚下漫々——溝に盈ち壑に塞がる

嘘があれやこそ……………三六

司馬頭陀——百丈和尚——和尚は骨の人——彼れば肉の山——花林と滄山——此れ滄山の主人
なり——吾が化縁此に在り滄山の勝境汝居る可し——喚んで淨瓶をなすを得ず汝喚ん何んぞ
か爲す——そつと裏から返したけれど——嘘が有れやこそ誠かわかる——果かない野末の尾花

でさへし

何ぞ會て飛び去らん……………四一

南嶽懷讓禪師——馬祖道一禪師——容貌奇畢牛の如くに行き虎の如くに見る——百丈和尚——
是れ何ぞ——何んの處にか去る——聲の主は誰れぞ——直箇の野鴨子

好雪片々の話……………四四

龐居士——南嶽の石頭禪師——萬法を侶たらざる者——江西の馬祖大師——西江の水を吸盡せ
んを待て——廓然大悟——靈照女——吾娘の鋒捷なり——生死自在——藥山禪師——好雪片々
別處に落ちず——餌を垂れて龍を釣る——全禪客——慈悲の一片——閻老子放さじ——惡水潑
きたる——盲の如く啞の如し

未審し壞か不壞か……………四九

法真禪師——劫火洞然として大千俱に壞す——仁王護國般若波羅密多經——成劫——住劫——
壞劫——空劫——水災——風災——火災——三千大千世界——本來の面目——無孔の鐵鎚——
應病與藥——圓悟和尚——肝要な問題——他所と事思ふな

禪は應用が大切……………五二

一、特に實際を貴ぶ……………五二

公案の透過——脱落——本證妙修の主旨——回互宛轉の妙致——大悟徹底——禪に於ける博識者——一種の翫道者——最も實際を貴ぶ——就中應用が大切

二、狹義の自力心……………五二

人々に依つて一律ならず——根底なるもの——自力心の涵養——聖淨二門——自力と他力——狹義と廣義——極端の孤立主義——一種の偏黨主義——三種の意義——堅牢なる信仰心——大勇猛心——初歩の自力心——高等の自力心

三、廣義の自力心……………五四

吾々の守り本尊——空劫已前の自己——本來の面目——苦の世界——樂の世界——苦樂相半はした世界——如意よりは不如意——樂天——瘦我慢——共に中道に非ず——百折不撓——千頓不退——信念——勤勉——勇進——守り本尊の腦髓

禪の功能……………五六

一、法を求めて懈らず……………五六

禪は山師の賣樂とは天地懸隔——日々服用して初めて身心の健全が得られる——不善意不善行

こいふ無形の惡病

二、行じくゝて行じ抜け……………五七

喫茶喫飯運作轉動の間も——禪樂は人間日用の常食——然らば其の定劑は——買はずとも各自が製造元——勤めて懈怠せざれ

三、何ぞ解脱を求めんや……………五八

本來から云へば——罪といつて別に無い——罪過は心病——願くば解脱の法門を與へよ——誰れか汝を縛す——法樂は其儘損せずして效能あり——眼は眼を見されども——指は指を見されども——此處が銘々の工夫しどころ

山僧大姉に論破さる……………六一

修業中の失敗談——伊豫大洲の龍護山樵禪和尚——參禪者に大姉が多かつた——容易ならぬ後澄の機も居た——月も日も漏らさで暗らき——橋爪新五兵衛の妻女——庭の面において輝く玉かしは——眞に大事を領得した人の歌——面前香爐子笑ひ囁々

禾山和尚と山僧……………六四

一、寢て許ある變な坊主……………六四

豊後杵築の養徳寺の結制中——何日もゴロ／＼して居る坊さん——正體を見届けん——お前は
何處だ——氣味の悪い尼僧——如來禪と祖師禪と——達摩は誰れの子孫か——心經の講義——
色即是空——そつちの空をこつちへ寄越せ——禾山は久留米へ——衲は郷里小倉へ

二、思はざる途中の邂逅……………六九

機鋒峭峻の鬼文常——水清ければ魚住ます——凡聖同居——龍蛇混雜——禾山和尚との約
に背く——本山からの呼び出し——社寺係への談判——柏樹さんちや無いか

三、それ切り音信不通……………七一

何うして此處に——一別以來の話——羅山和尚遷化——本山存亡の關ヶ原——み／＼しろに残し
／＼くつの片足も——また逢はぬ別れならんと思へども——それ切り今まで一度も——禾山く
きは一體誰ぢや——河野廣中の談——わしも年とつた

禪 定 三 昧……………七九

一、清風自ら禪床を巡る……………七九

來る人も來る人も愚痴を言ふ——愚痴を並べたところで——熱心なること僧侶も遠く及ば
ず——一部分の人は斯く熱心に——一般から云へば心細くなる

二、純一に修業三昧……………八〇

衲の修業時代——東京より一層熱い——托鉢から歸つて來る——僧堂へ驅げつける——風連し
の悪い僧堂——流れ出る汗の間から蚤や虱——不潔を自慢にする譯では無いだ——今の雲水に
は此の氣概が

三、永福寺の鬼文常……………八一

鬼と云はれた文常老漢——漢方醫をやつた面白い人——其の接待は峻嚴無類といふ有様——多
くの信者が生佛と崇めた——熱湯中に落ちし子供を癒す——遂ひには傳染病患者までが——藥
以上に効能あるお札——信仰の力は恐しい——老漢は破れた麻衣一枚で——猛烈なる修行

四、水清ければ魚棲まず……………八四

力量に於て第一流——大地名藍を望まず——師家の誠めぢや——阿波の春叢和尚——其の言葉
に契ひを立て、——夜は必ず深更に起き出で、丈室に坐禪——一夜大いに頭を打つ——一枚の
布團に一所に寝て——其當時の事を思ふと誠に有難い

黄 檗 の 禪 風……………八七

一、念佛禪の眞意義……………八七

臨濟宗や曹洞宗と異なる點——巡照といふ役——凡て挨拶を念佛でする——生死事大無常迅速——有名な大泥棒日本左衛門——時間を計るに凡て線香を用ひた——其の念佛は普通にいふ念佛とは大いに意味が違ふ——教禪一致の立場から——蓮佛教の根本は戒定慧の三學——念佛の上には禪の消息がちやんこ——一聲の南無阿彌陀佛の中に八萬四千の法門が悉く——縦に時間を絶し横に空間を絶す——臨濟の一喝禪——徳山の棒頭禪——日本黄檗の念佛禪

二、閑忙一如の生涯

九一

隱元禪師二百五十回忌——直空大師の賜號——宗風擧揚の爲め一刻も安閑させず——支那福州の清福に生まる——二人の兄と共に母の膝下に——父の行衛を尋ねて國中を巡る——有名な觀音の靈地南海の普陀山——黄檗山の鐵源禪師に就いて出家す——一心不乱の辨道修行——東林にも亦た佛ありや——地に東林あるも佛性に東西なし——徑山費隱禪師に法を嗣ぐ——日本に渡來す——宇治黄檗山建立までの慘酷たる苦心

三、逸話と眞空の出所

九五

高德な人には神秘的な物語が付きもの——入口の大岩が平になる——鉢植の白蓮華忽然として開く——一羽の鶴が殿堂建立の地を示す——夜間に上堂の實例——曹洞宗の惟慧道定禪師——行持頗る綿密——眞空は即ち妙有——眞空の二字は最も能く禪師の面自を顯して居る

相撲 禪 話

九九

一 無碍自在の大手品

九九

教外別傳不立文字——畢竟するに絶對の境を指して云ふもの——無自性不可得の眞理——さア斯る見地に到つたならば——大には方所を絶し細には無間に入る——無碍自在の大手品が出来ろ——柏樹子となつた行脚僧——睡眠中に牛と變形す

二 陣幕關の大浪

一〇〇

五十年前の實験談——伊豫國波止濱の圓藏寺に派遣さる——永い間の船待ち——陣幕一行の大相撲——薩州島津候のお抱へ——體格と云ひ力量と云へ——惜しいこゝには憶病——勝つ方法の傳授

三 可哀想に負け通し

一〇二

如何に和尚様は物知りでも——屹度勝てる方法があるなら——お前の名は何んぞ云ふ——眞の大浪なる工夫が專一——此處ぞ一番彼れを強い觀念に入らしめる所ぞ——物我一體の法

四 必勝の法を傳授す

一〇三

自分は大浪ぢや——島ても山でも洗ひ流す勢ひで——盡天盡地都蘆一面の大浪——翌日の相撲

には果して全勝——相撲取は頭腦が單純ぢやから——萬物を會して己れとなす者は其れ唯だ聖人乎——心境一如物我一體の端的

隨意無礙の三昧……………一〇七

一 身心自由の人……………一〇七

寶誌和尚——未だ出世の明師に逢はず任けて大乘の法藥を服す——蓬ふの逢はぬさいふ相對邊のものぢや無い——分別に涉れば相距るこゝ白雲萬里ぢや——本來の面目坊——此の身心是れ自由の人

二 大和魂の發輝……………一〇九

任運騰々として痴への如く相似たり——畢竟するに隨意無礙の往來——是れ如玄三昧の消息——眞忠は忠を忘る——咲いても散つても見事な櫻花の妙用

三 隨意無礙の生涯……………一一〇

本分の那人——阿耨菩提——畢竟するに名目——有ゆる言詮意路を絶したる妙境界——名譽や利益の爲めに動ぜられぬ——文常和尚——一寸類の無い機鋒の峻烈な人——南天棒も痛棒を喫した仲間——和尚の如きは眞に隨意無礙の三昧に入った人

徳山和尚の機鋒……………一一三

此の邪教打破せずんばある可からず——載する所のものは是れ何んぞ——我れに一間あり——那箇の心をか點ぜん欲するや——近處何んの宗師がある——潭も見す龍も亦た現はれず——眼中三世の諸佛なし——蓋天蓋地これ龍潭——深更何んぞ下り去らざる——門外暗黒なり——箇の何を見ても禮拜するや——爾今更に天下の老和尚の舌頭を疑はす——箇の漢牙は鯛樹の如く口は血盆に似たり——嶮峻極まる家風——道へ得るも三十棒、道へ得ざるも三十棒——瀉山和尚との商量——また早々なるを得じ——甚だ奇特なり——瀉山また忙ならず——適來の新到何んの處にか在る——法堂を背却し草鞋を着けて去れり——雪山に霜を加ふ——獨立不羈の境界

坐禪は作佛に非ず……………一二三

馬祖道一禪師——南嶽懷讓禪師——坐禪して何をか圖る——磨礪豈に鏡をなすを得んや——禪は坐臥に非ず——佛は定相に非ず——無住の法に於て取捨すべからず——迷悟二つながら——坐臥ともに

芳草に随ひ落花を逐うて……………一二七

景岑和尚の遊山——和尚什麼の處に——去來蹤跡なし身心自ら輕快——大いに春意に似たり——也た秋露の美薬に滴るに勝れり

狗子に佛性ありや……………一二九

趙州從諗禪師——有情非情同時成道——草木國土悉皆成佛——一切衆生佛の智慧徳相を具す——伊に業識性あるが爲め也——一箇の無字——古來幾多の英傑を惱ます

喫粥し了れりや……………一三二

乍入叢林乞ふ師指示せよ——喫粥了也未しや——鉢盂を洗ひ去れ——口唇上に光を放つ——一言一句寸鐵人を刺す——悟り臭きは眞悟に非ず——早合點する勿れ

未だ唇を沾さず……………一三四

曹山和尚と洞山和尚——清税孤貧也——迷ひは愚か悟つた何物も——洒々落々の境界——香原白家の酒三盞喫し了つて——曹山具眼來機を知る——且らく道へ那裏か是税闍梨酒を喫する處

智門の蓮華荷葉……………一三六

智門光祚和尚——蓮華未だ水を出でざる時如何——水を出で、後如何——本體と現象との二方

面——穴にはまつて愚圖ついで居ては——本體即現象

洞山の寒暑迴避……………一三八

寒暑到來如何か迴避せん——不生不滅の佛境界——寒時は闍梨を寒殺し熱時は闍梨を熱殺す——渾身寒になり切り渾身熱になり切る——生死即涅槃——煩惱即菩提——勝手に放言はしても

洞山の麻三片……………一四〇

洞山守初禪師——如何なるか是れ佛——答へて曰く麻三斤——答處まさに千斤の力量あり——凡情攀す可からず——頗る肝要な問題——殿裏底——三十二相——眼横鼻直——乾屎橛——言葉尻について廻るな

劉鐵磨の臺山……………一四三

瀉山靈祐禪師——老孛牛汝來れりや異類中行の響き——奇想天外の問ひ——箭空しく發せず——大唐鼓を打てば新羅舞ふ——任運無作の活機論

百丈の獨坐大雄峰……………一四六

博識高德の大宗匠——百丈清規——一日作さざれば一日食はず——如何なるか是れ奇特の事——

雪峰の籠鼻蛇

………一五〇

言中に響きあり——句裏に機を呈す——俗例の衲僧——賞棒と罰棒——電光石火機變を存す
南山に一條の籠鼻蛇あり——本來の面目——千古萬古一味平等の體——千差萬別の現象界——
今日堂中人あつて喪身失命す——南山を用ひて何かせん——蓋天蓋地籠鼻蛇の毒氣——諸人の
面前に露堂々

黄檗の唾酒糟漢

………一五三

黄檗希運禪師——汝等諸人は悉く唾酒糟の漢なり——大唐國裏に禪師なし——禪なしと道はず
是れ唯だ師なし——問端鉤頭に餌あり——直下に本地の風光に接せよ

主心お婆々粉引歌

………一五五

有難いぞや天地の御恩——すゑの野山の草木まで——繁昌めされよ萬代までも——心短氣な殿
子の辭に——周の文武の太公望が——唐の大和の物知りよりは——太刀や劔の又もたゝぬ——
神さまります高まが原も——出家も沙門も高位も知者も——嬉し目出度や主人の徳で——四國
西國めぐるもよいが——不死の丹藥望みな人は——主心お婆々は幾つになりやる——虚空のお
やぢやは死にやるま儘よ——山河大地を我手に持てば——命限りに切り込む所存——主心お婆

々は何處らに御座る——臍の辻から二丁下——煩惱菩提あともない——墮して苦む地獄もない
が——往いて樂む淨土もないぞ——邪見斷無の我儘悟り——本地の儘なら眞の佛——佛果菩提
も夢中の夢よ——生死涅槃も飛ぶ鳥の跡——問ふな學ぶな手出しをするな——見ぬが佛ぞ知ら
ぬが神よ——大勢並んで櫓を推す如く——悟後の大事は即ち菩提——菩提心とは何うした事ぞ
——見性ばかりぢや乳房が細い——細い乳房ぢや子は出来ぬ——お婆々死んでも何國へござる
——こめてたもれや帆かけ船——四十九曲り細山路を——風の色香はごのよな物ぞ——關鎖な
ければ禪ぢやない——たごひ虚空は盡きやるま儘よ——油斷めさるな御まめで御座れ——婆々
は是れからお暇申す

まあ坐われ

高津 柏樹 著

主心の坐處

一、藁人形も同様

迷ひとか悟とか、凡夫とか佛とか、いろく口には説くけれども、理窟は解り切つて居るけれども、一向に理窟通りに行れない、とんと殺活の機が現はれない。主心自分の坐り處が無いと、藁人形も同様、店先の飾人形も同様ぢやわい。軍人ぢや、政治家ぢや、實業家ぢや、教育家ぢや、宗教家ぢや、信心家ぢやと、見掛や言草は成程立派でも、それに對して主心自分の坐處が無けらにや、變なものぢやないか。政治家

政治家たる所は賄賂や威嚇ではあるまい。日比谷の原頭に人の政論を彌次るが主能であるまい。軍艦丸吞が軍人さんか。石礫鐘詰が實業家の製品ぢやらうか。七條九條の袈裟をかけて讀經したり、怒羅引導を渡すばかりが坊さんでもあるまいよ。四國八十八ヶ所ぢやとか、西國三十三ヶ所とか云ふて、參詣巡禮する者も多いが、鈴やオイヅルの姿が信心ではあるまい。主心なければ無駄足ぢや。方角違ひぢや。諸人、脚下が危いぞ。主心は何處へ放つて御座るか。何故、本家郷に歸へらぬか。迂濶な議論を戦はして、揚足とつたり胸倉つかんで興がつたところで、選出された國民は喜ばぬぞ。舉國安泰なれと願つてる國民が、軍艦丸吞みにされて安心が出来るか、諸人の主心は何んぢや、何處ぢや。少しは氣をつけて貫はにやならぬ。

二、主心は何處ぞ

斯う云へば、主心は何處ぞい、何方ぞいと騒ぎまはらうが、主心は氣海丹田、臍か

ら二丁目ぢや。……と云へば又たぞろ心得違ひが喃。世間の人は直ぐと下腹のことばかりぢやと思つて居る。大間違ひぢや。臍下どころか全身のことぢや。頭のギリ／＼から踵のはてまでぢや。隙間の無いのが丹田ぢや。佛魔が來て窺へども入ることは出ない。丹は單ぢや、單一ぢや、絶對ぢや、生もない、死もない、本分の主心は過去久遠劫から此の丹田に充ち満ちて居るのぢやが、唯だ氣がつかぬばかりだ。これに氣がついたら即ち其時即刻、主心の活現成である。政治を論ずるも國防に當るも、救世情も西國巡禮も、這裡に至つて眞の生命が現はれて來る。此の主心が即ち決心ぢや。金剛心ぢや。岩をも透す一念ぢや。成功の秘訣ぢや。幸福の庫を開く鍵ぢや。不動心ぢや。銀山鐵壁、萬里一條の鐵、出身の一路は此處から發する。

三、主心を現すが禪

禪は此の主心本分を顯はすのぢや。此の主心を軍人武士から取り去つたら、腰ぬけ

武士ぢや。白旗を立て、降参する弱兵である。若し此の主心を政治家から取り去つたら、無能政治家ぢや。ワイ／＼連ぢや。失政問題とか何んとか騒がれて、遂には政界から葬り去られてしまう。若し此の主心を商人から奪ひ去つたら、算盤が弾ぢや。帳尻が不の字ぢや。彼此と頭痛を悩んでる間に大損害、店じまひぢや。夜逃げぢや。實に主心がお不在では何も出来ぬ。さア諸人の主心は何處ぢや。何うして居るか。臍の下か喃。ワイ／＼やつて居るが喃。氣をつけにや間熱地獄に眞逆さまぢや。

大學の三綱領

一、冷暖自知す可き語

何んぢや、禪機ぢや。我々の日常着衣喫飯、行住坐臥が皆な是れ禪機とならねば駄目ぞ。行住坐臥その儘が大道とピツタリ一つになつて謂ゆる禪機が満ちて來ると、其人は既に佛祖と手を携へて呵々大笑する底の明眼の士ぢや。大學にある明德を明かにした人ぢやわい。

「大學道在明明德」と云ふ八字は、元來、人々の冷暖自知すべき語ぢや。決して容易の看をなしてはならぬぞ。如何か這箇八字子中の字眼、さア仕うぢや、看よ、看よ、明德の「明」の字が目當てぢやわい。明は即ち大智であつて本來の明ぞ。丁度、本覺ぢや。而して此の明德を「明かにする」と云ふのが始覺ぢや。教相では種々にごたく

と云ふが、一體、本分上では仕うだ。明德と云ふも既に贅言ぢや。何處に其んな瘤を着ける必要があるか。僅かに一念を生ずれば十萬八千里ぞ。口を開かんと擬すれば、擬する以前に六十棒ぢやハツハ、唯だ機根下劣な衆生があるから、「明德を明かにするに在り」なぞと云ふのぢやわい。

二、己の行ひと顧みよ

すでに自分の明德を明かにしたならば、更に進んで一切衆生を明かにする働きがなくてはならぬ。即ち「在レ新レ民」ぢや。上求菩提、下化衆生、と間斷なく四弘の願輪に鞭たねばならぬぞ。此の上求菩提、下化衆生、が整はねば二乗聲聞の窠窟に陥つてしまふぞ。これ故に、修行者は言行一致が肝要ぢや。言、行を顧み、行、言を顧みて、朝から晩まで正念相續せよ。正念相續すれば、修身齊家、治國平天下、仕うぢや、さう行かねばなるまいがさ。これを「在レ止ニ於至善」と云ふのだ。

人々が唯だ一誠に正念相續をせねばならぬといふ大事の爲めのみに、釋尊は長い間雪山に苦行し、達摩も其處をくやんで東土に來たのぢや。併し、道を知る者は多く、行ふ者は少しぢや。只管道行作麼生、道を行つて呉れ、行つて呉れ……。先日、老洩の居士で深井虎藏さんといふ方にな、居士號を授けた。それは、道を知つて而して行ふと云ふ語により、「而行」といふのぢや。實際、達摩も道を知つて行ひ得ざるものをくやんだぞ。一言にいふと、直に己れの行ひを顧みよ。

三、天地位し萬物育す

中庸の中の「君子胡不慥々爾」といふところに行つて見ると、佛教も儒教も二つは無い。頭を剃つたが坊主でなく、孟子も孔子も莊子も儒道の人では無い。皆な一樣に大道の人のみぢや。元來、一方に偏することは、大道の禁物ぢや、公道を脱した者は聖賢では無い。何が故ぞ。過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し「天地位、萬物育」とい

ふところに眼をつけよ。

公道を脱せぬ人が澤山になると、大砲も、軍艦も、裁判所も警察も不要となる。若し、然うでないに、偶ま悟つても、聲聞悟りでも何んの役にも立たぬ。門より入るものは家珍にあらず。人、各自に、大學の三綱領たる、明德、新民、至善を冷暖自知して慕直に行つたならば、修身齊家治國平天下ぞ。同じ大悟了畢の人でも、此の三綱領に反する者は、まだく路頭に迷ふ者ぢや。なぐれ者ぢや。岸を隔て、越山が多いぞ。何故、早く家に歸つて來ないか。即今、歸家穩坐底作麼生。文字や言句では此の味ひは判らぬぞ、勉旃。勉旃。

歲頭の一針

一、理地分上の活三昧

凡そ大法と云ふものは、佛にあつても増さず衆生にあつても減らず、新年が來たから新しくなるものでも無けれや、年末になつたから古いと云ふこともない。不増不減、不垢不淨、不新不古、不去不來、不受不施で、法爾自然に宇宙天地の間に充塞して居るものぢや。だから、最う法まみれで、拭ひ取ることも、洗ひ去ることも出來ん。それを法とは何んぞや、佛とは何んぞや、説いて下され、教へて下されと云ひ廻はつて居るが、説く説かれるの、教へるの教へられるのと云ふものは御座らぬ。説く老衲も法なら、説かれる皆さんも法ぢや。能説の法とか所説の法とか、能所對待は元から無い筈。

禪に不立文字教外別傳なぞと、別に不思議の妙法でもあるかのやうに云ふが、不思議で窺ひの出来ぬやうなものが、宇宙萬象、人々の外に在つたら、生まれもせぬぞ、生きても居ぬぞ。法の眞唯中に寝起きしながら、法は何處ぢやと探し廻るやうな寢トボケをせまいぞ。不立文字教外別傳なぞと云ふから、衆生を迷はす種となるのぢや。本分は實際理地ぢや。理窟を捏ね廻さにや、法の顯示が出来ぬと云ふことは無い。欠伸一ツしても、鼻息一ツついても、チョツと眉を揚げて、瞬きしても、理地分上の活三昧ぢや。

然し、其の妙用以前に已に法は存して居る。だから提唱ぢやの說法ぢやのと云うて能所なきところに強いで能所を立て、說法するもの被るものと云ふやうな佛事化他門は、第二義、第三義に落在したことで、直に本分上からスベリ落ちて、慈悲落草の泥マロビになつた姿ぢや。故に、言説に由つて實際理地を了得しようなんど云ふのは以ての外の了簡違ひである。此んな事は吾が門内で云ふばかりで無い。中庸にも「聲色之光、擊石火といふのは、其處の早業ぢや。」

二、禪は消化が第一義

ところが、其の本地の分上に證當する第一義を知らぬから、三五度の提唱を聞いたぐらゐ、經典祖録を幼稚に讀み嚙つたくらゐで、我れ得たりとなし、公案の三ツ四ツを透つて、天下の大法に即しきたやうな了簡で居るが、皆な迷中の所解ぢや、透つた透つたと云ふものが、チツトも透つて居らぬ。婆さんが針の目に糸通すやうなもので通つたやうで通つて居らぬ、だから、最う業因を造り通し、惡業の爲通しぢや。是れでは佛地に歸ることは出来ぬ。故に同じく經録を讀むにも、公案を工夫するにも、もつと消化するやうにせにや斯んなことでは幾ら參禪しても誦經しても駄目である。禪

には消化が第一義ぢや。理窟の上でばかり合點しても、本當の消化が出来てないから實際理地の本分に作用かんで、惡業の造り通しぢや。

業とは動と云ふことで、一切萬法みな動ではあるが、茲は妄りに動することぢや。世の中の人皆が皆な妄動して、實際理地の上に働く工夫をせないから、社會は眞闇黒で監獄も警察も裁判所も大繁昌、間違つたことをして、偽つたり、言ひ譯をしたりするから、チツとも地獄の數が減らぬ。減らぬから、門には門門をし、玄關にも鍵をかけ押し入れにも鍵をし、押し入れの中の筆筒にも、筆筒の中の金庫にも錠をかけにやらぬ。證文を書いた上に印を捺し、印を捺しても猶ほ心配で、保證人を二人も三人も立てにやらぬ始末では今日の文明も不の字をつけねばならぬ事になる。だから、修業が必要になつて来る。禪道に志す者は、早く眞人間になつて、是等の煩惱作業の嘆を覺醒せしめて貰ひ度いものであるが、前にも云ふ通り、祖録や公案の數ばかりを計度して、文字言句にへたばり廻つて居ちや、眞箇の佛地に體達することは出来ない。定慧等し

く行じて眞に消化するやうにせねばならぬ。禪の修行は消化が第一義ぢや。

三、大智慧の面前にも

雪竈和尚といへば、頌聖とまで云れて、文章に妙を得、學に精通した人で、皆な知れる通り碧巖百則頌の作者ぢやが、或日、同參の金鵝長老が雪竈和尚を訪うて、四方山の話からヒョツとしたことで、雲門の「藥病相治」の問題が出た。之れや碧巖にもある公案で

「藥病相治、盡大地是藥、那箇是自己」

といふのぢやが、議論滔々と辯じ合つて居たが、那箇が是れ自己の端的に到てバツタリ行き詰り、雪竈が

「金鵝道者來相訪、學海波瀾一夜乾」

と頌した態は何うぢやらう。斯んなことは今日の人ばかりで無いと見える。大智慧の

面前にも三寸の闇ありぢや。

唐朝の裴相が、洪州の龍興寺に參詣して、壁の畫像を見て、「此人は何處に居るか、尋ねて來い」といつて居るとき、まだ勞役して居た黃檗禪師が出て來て、「裴相どの」と一聲叶ふと、裴相は「ハイ」と應諾した。そこでスカサズ「裴相甚麼處にかある」と云はれたら、裴相、當下に其の旨を明らめたと云ふことぢや。何んでも理窟で知らうの合點しようのとしたところで、輕を掴むやうなものぢや。瞬間は握つた積りぢやらうが、皆な指の間から抜け出て仕舞ふ。隱元禪師は、

「讚するも何んぞ及ばん、毀するも何んぞ及ばん、一條の白棒是れ直指」

と曰ふて御座る。此の實際理地は始めから白棒で、鉤かけるにも及ばぬ、磨くにも及ばぬ、白ペンキなど塗り立てるは更に無益なことぢや。此の白棒を眼前に直指されたとき、實際理地の妙相に氣がつかにやならぬ。其處の了得と云ふものは、凡て坐禪で合點する筈ぢや。合點が行つたら、日々是れ好日、大般若は毎日クリ通しであらう。

白隱時代の精神を

一、恰も春夏二期の間に

春爛熳の花盛りが過ぎると、青々茂々とした緑葉の夏が到來する。花も咲いた、葉も盛り、實も成つたと喜んで居れば、何日とはなしに蕭颯たる秋風に百草萬木は黄葉を呈し、蟲の啼く音も絶えくに、早や枯嵐寒く、霜雪を戴く冬籠りが行つて來て、一切萬事が休息状態になつてしまふ。白隱禪師の時代は、恰も春夏二期の間に相當する。禪師は妙心寺の孫末寺で、實に情けないほどの貧乏寺であつた。松蔭の敗利に獨坐して、四來の參徒を提撕された。其盛況は實に往來絡繹晝以て夜を續ぐといふ有様で、天下道俗の志氣者は、雪の降る日も暴風の時も、道の遠近、時の寒暑を忘れて松蔭寺に通つたものぢや。従つて出來た人も可成り多かつたが、其の出來佛よりも、上

下道俗を問はず、諸方から集まつて来て、行往坐臥に不自由不便をきはめながら、專念工夫に骨折つた其の堅い精神が今日、欲しいのぢや。

二、相談悟り謎々禪のみ

其の時分の勢ひが、今日まで續いて居たら大變なことぢやが、近頃は提唱や、接心の評判ばかり高うて、本當の精神が最う抜けてしまつて居る。多くが相談悟り謎々禪になつて、白隠時代の精神は薬にしたくてもない有様になり果てた。春夏の盛りも僅かの間で、今日の禪は最う社會が立ちすぐつて冬籠りに入らうとして居る。自然界の運行は循環して又た來る春夏の眺めに樂しみやうもあるが、人間界は一寸先きが闇の夜ぢや。歴史は時代を繰り返すと云ふが、法道の精神は正念相續し、祖々正傳の上に光りが發たれるのだから、斯うして夢中に過ぎては、決して、大法の再興は覺束ない。白隠の宗旨と、當時、參徒の精神とを並び相續して、茲に本當の白隠を出し、眞

箇に活きた禪法を甦させるのが、今日の急務である。

三、今日其精神が欲しい

傳心法要の最後に出て居る、鎌倉壽福寺の開山、大休正念禪師の跋を見ると、弘安年間と云へば蒙古の攻め寄せて來た時で、國內は上を下への大騒ぎ、國邊は已に殆からん形勢であつた。時に一方では心膽修鍊に専念し、禪刹は參徒を以て充たされ、非常に盛んであつたといふことだ。ところが、それに反して、白隠時代は、世は已に泰平となり、江戸は繁華の中心で、世人は奢りを極め、何處も此處も道樂者が繁昌して上下の人心が緩み切つて居る最中ぢや。その時に當り、白隠禪師を中心とした修禪行道の士は、上下道俗を通じ天下に互て盛大を極たのであつた。一方は大戦の極、一方は太平の極、人心が緩んで居る時は、最も始末の悪い時であるが、已に彼れだけの事をやつて居るのぢや。降つて今日を見ると、世界の形勢は朝變晩化、天下を舉げて戰

亂の巷と化し、事々物々が吾れ／＼の一身上に迫つて来て居る有様ぢや。ところへ精神鍛錬の事が一向出来て居らぬ。皆んなが外圍に支配され、物欲に眩惑されて、周章へまくつて居る。皆な腰抜けぢや、ひよろ／＼ぢや。これでは國家大事の場合に何うする積りか、自己が逆境に陥つたとき何うする積りか、後での泣きごとは駄目ぢや。世人を救ふ者は出家の務め、救はれるものは世人、出家も世人も同一精神でやつて行かねばならぬ。イザと云ふ時にバタ／＼しても駄目ぢや、太平の時も戦亂ぢや。白隠禪師はそこを見越して天下の諸人を濟度し盡くさうとせられた。白隠禪師の生々した宗旨と、其の時代の參徒との精神を今日に再活せねばならぬ。これが訥の白隠禪師を思つて發した希望である。

爐頭閑話

一、座禪と入室を勵め

禪を修めんとする者は、提唱ばかり聽いて居たとして、何んの益にも立ちませぬ。専ら座禪と入室とを勵み行はねば駄目ぢや。語黙動靜みな是れ座禪ぢやから、必ずしも靜室打坐を要しないが、併しナア、初心の者は靜かな處で、一日に一時間でも、二時間でも、乃至は三時間でも、何時間でも宜いから、ウンと坐れ。是非とも坐れ。これが出来ぬやうなことで、達摩宗の存する方角さへ立たぬぞや。昔、釋迦如來は、一日を三つに區分して、云ふて置かれた大事がある。

「一は座禪、二は我が宗門を極め、三は外道の書を極む」

と。まア、何んだらうと、座禪が一番初めぢや。そこで坐ることは坐るが喃、未だ練

れぬ間は、兎角、種々様々の妄想が湧いて出て、なか／＼心が鎮まらぬものぢや。そいつを凌ぎ凌いで居ると、自ら根境并び忘じて、打成一片、爽快きはまりのない「禪定」に至ることが出来るのぢや。

それに、座禪を修行すると、自ら知らず／＼の間に意志が鞏固になつて来る。従つて萬の出来事が目前に迫つて来ても、動じない。落ついて其境に處して行くことが出来るのである。この事は老衲の経験に照して語るのぢやから、決して間違ひはない。

二、本も讀め詩も作れ

座禪や入室に次いで肝要なことは、讀書をして廣く教義を知ることぢや。經文を讀め、語録を讀め、和漢の書も讀め、詩歌も作れ、道をひろめるには之れ丈けの修行を積んで居ないと駄目ぢや。老衲なぞの雲水中は、僧堂がひごく矢釜敷くつて書籍は勿論、筆硯の影さへもとゞめる事は出来ぬで喃、學問をするのでも容易なことぢやなか

つた。併し、白隠さんなども

「廣く内典外典を探り、無量の法財集めておいて、三つの根機を救はにやならぬ」と云ふて御座る。なんだらうと、この眼が見える間は、ウンと讀むが可いわい。

三、吹き飛ばす歸天齋

老衲は修行の後、彼方此方の寺院や居士の會に招かれて、語録の提唱をしたり、入室を聴いたり、それは／＼今日に至るまで、眠むる時間も殆んど無いやうなわけぢやが……左様／＼、東京ぢや、本所の五百羅漢（今は目黒にあり）本郷の麟祥院、小石川の白山道場、中野の大石正巳居士の宅を初め、諸々方々で雲水や居士大姉を接待したものでちや。就中、大石居士の宅では二階を老衲の室とし、階下を座禪場として主人の正己居士を始め、河野廣中、箕浦勝人、田中舍身など云ふ政治家や、奇術師の歸天齋正一などが集まつて熱心に修行したものぢや。ところで、歸天齋といふ男が、大層

な法螺吹きで、流石の政治家共も吹き飛ばされるぢや。すると、箕浦も負けぢや居らん、皆なの者と相談して、歸天齋の家に押しかけるといふ始末で、其間なかく面白話があるぢや。

四、ゆきゝの人を其儘に

座禪をするには、動中の静、静中の動といふ道理をわきまへて居らんと、眞の禪定に入ることは難いぢや。静かな處でないで、心を單一にすることが出来ぬやうでは、そつとでも騒がしい處に行くで、もう散亂心になる。それでは駄目ぢやによつて、古來、我が禪門では、動靜二境にこらはれぬやう、八釜しく修行させるのぢや。十字街頭、肩摩穀撃の眞唯中に於て、平然として打坐澄心が出来ぬことには、眞の禪者とは云はれぬのぢや。大燈國師は、昔京都の四條橋下で聖胎を長養して御座るとき、

座禪せば四條五條の橋の上

往來の人を深山木に見て

と詠まれたさうぢやが、人を深山木に見るまでもない、往來の人を其儘にして打坐澄心するところに、座禪の妙諦があるのぢや。色即是空、空即是色を徹見すれば、其邊のことも自ら判る。併しながら、打座と云ふても、石地藏のやうに、座つてばかり居るのをいふのぢやない。行住坐臥、動靜運爲、喫茶喫飯、屙屎送尿、くさめ一つするでも打座ぢや。商人が帳場に座つて、算盤を弾くのも打座、百姓が鋤鍬を持つて田畑を耕すのも打座、學生が學校で勉強するのも打座ぢや。

六祖大師法寶壇經に曰く「何をか無念と名づく、若し一切の法を見て、心染着せざれば無念となす。用は即ち一切處に徧く、亦た一切處に着せず、たゞ本心を淨うして六識をして六門より出でしむれば六塵の中に於て染なく醜なく、來去自由にして、通用滯ることなからしむれば、即ちこれ般若三昧自由解脱、無念の行と名づく、若し、百物思はず、當に念をして絶えしむべきは即ちこれ法縛、即ち邊見と名づく」と云ふ

て居る。座禪を以て枯木土塊の如くに誤解してはならぬぞよ。

又た禪箴に云ふ、「規矩循矩を守るは無繩自縛、縱横無碍なるは外道魔軍、存心澄寂は黙照邪禪、恣意忘縁の深坑に墮落す。惺々不味は帶鎖擔枷、思善思惡は地獄天堂、佛見法見の二鐵圍山。念起即覺は精魂を弄する漢、兀然習定は鬼家の活計、進むとさんば理に迷ひ、退くとさんば宗に乖く。進まず退かざるは有氣の死人。且く道へ、如何か履踐せむ。努力して今生須く了却すべし。永劫に餘殃を受けしむること莫れ」と。禪を學んで禪病に罹る徒が多い。須らく此語を熟讀翫味すべきである。

老爺の斧

一、工夫上慎むべきこと

自分から自發的に舉動はふとせず、何かの型に従つて我が心行を作用かせようとするのが、今日の人の悪い癖ぢや。昔の人は學問をするにしても、事業を營まうとするにも、自分自らの力を、それに向けかゝつたものぢや。だから、學問をしようと思志が起れば、寺小屋なり、儒者の宅になり、進で行つて教を請ふたものである。それぢやに依て、學者の宅は態々看板をかけたでも、門戸に市をなすと云ふ工合で、生徒が雲集し、互ひに學問を競争したものぢやて。ところが現今では、國家の法律として學校も建て、立派なものになつて居るが、眞劍になつて勉強するものが無い。皆んな嫌々ながら、學校に出たり、家の財産から見えの爲めに、馬鹿忤を學校に出すと

云ふ親馬鹿もある。つまり國の規定だから、仕方がない小學校ぐらゐは卒へさせようといふ型ばかりの學問をしたり、折角、専門の學校に入つても、書籍や雜記帳ばかりにへタバリづき、丸呑みをして消化不良にかゝり、世間に出てから修得した智識力を用かせ得ない奴もある。何うも困つたものぢや。教者や被教者はチト顔でも洗つて見るがよいぞ。我が禪門の修行者が然うぢや。機關の言詮の難透のと、昔の宗師が爲人の手段として、隨機にこさへて出來た公案の數ばかりに執着して、やれ無字が透つたの隻手が透つたのと騒ぎまはつて、公案の型に左右されてるやうぢや、見性も悟道もあつたものぢやないよ。型に習ふて目をひき出したり、齒を食ひしはつたりして禪座を打したところで、向々に拵へた手段の公案に、我れも我れもと商量して何が透れるものか師家も師家ぢや、もつと人々に適稱する公案の振出しをやらにや、爲人の功もないものぢや。世間の生嚼り禪者流が、禪僧の日用行事を見習つて、悟つたものは此通りと、人間道が無視した離れ業をやつてるが、危険千萬な話である。師家も學人も早く目を醒まして、チト顔でも洗つて見るがよいぞ。

二、源の釋迦佛を諦觀せよ

河の流れも遠くなれば、穢物を混へて流源の純潔を失ふものぢや。佛法も是れ純潔なものであつたが、護教修法者が世間の俗物に目を廻して來たものだから、すつかり本來の淨光を汚してしまつた。祖師の善智識のと崇めたところで、然う皆んなが正傳の佛法を瀉得したものは云はれぬぞ。夫れを何々祖師の語録で候ふと、勿體をつけて金科玉條の如くに思ふと、飛んだ間違ひを生ずるものぢや。語録を讀んで見ると怪しげな點が處々に見える。これや當祖師に隨侍したものが、誤聞して祖述したから起つたものであるに違ひない。

一體にいふと、學人が經典、祖録にへタバリつく弊からぢや。佛法を本當に活かして居る師家は、今は僅か三四に過ぎない。多くの教者が似非佛法を會たり賢しとやつ

て居るのぢや。だからもう、盲人を案内するやうなもので、足といふ足が全く馬の糞や牛の糞で汚れて居る。宗教家といふ金看板をかけて足下の味いことをやつてるものが何程あるか知れん。恐しい事ぢや。氣をつけさつしやい。だから云ふのぢや。道俗ともに、此の濁流の中に息喘ぎして居ては、人生の明りは立たぬ。ズツと遡つて釋迦佛の足下に到つて、清い澄み切つた淨法性水を吞下して、心身の汚垢を一洗すべきである釋迦佛とは何んぞ、お互ひに參究して見さつしやれ、悪いことは云はぬぞ。

三、達摩大師の傳法

達摩さんが海上に漂ふこと三年、一枝の葦も高く低く、遠きよろづさと十萬里、萬難を冒して禪法を支那に御傳へになつた。其の御心情を察するがよいぞ。皆は九年面壁の睨み達摩ばかりを思つて居らうが、達摩さんの御心は純潔な釋迦道を弘通して迷情を救ひたいと云ふ、千萬無量の大慈悲からであつたのぢや。今こそ畫けば雲助の親

分見たやうにしてしまつて居るが、達摩さんほど優しい方は禪門の祖師では外にないのぢや。

此の達摩さんの正傳佛法が、二祖、三祖、四祖、五祖、六祖と續いて行く間に、もう生粹の味ひが變つて來た。醸造の本場酒は立派なものであるが、問屋から問屋へ、卸賣から小賣と來る間に、酒の水か、水の酒か分らぬやうになつて、遂う腐つてしまふやうなもので、正傳の佛法も次第に薄らいで、近頃では腐れか、つちや居ないか知ぬほど、混り氣が生じて居る。事に依つたら偽造佛法屋があるかも知れぬ。學人も一つ活眼を開いて偽造佛酒の爲めに腹を損ねないやうにして貰ひたいものぢや。本場の佛酒を味はふには釋迦佛の足下にまで遡らにやならぬ。

四、世法と佛法

世間の人は、佛法を信することを、人間世界の外に生きるやうに思つて居るが、何

まあ坐われ

三〇

んの因果でそんな考へを起すのぢや。我が身の爲め、國家の爲め、社會の爲め、信じて行せねばならぬ此の佛法の有難味を知るがよいぞ。釋迦牟尼佛が此世に生現なされたのは、何が爲めぢや。決して唯事と思ふてはならぬ。皇祖の言に

觀機兜卒天神聖諸種中降貴盛宜奉視

とある。上に行ふところ下これにならふで、貴族の中に生まれれば、其の教説も從つて早く下に行はれるのぢや。故に、佛は、天竺の宮中に降臨せられた。佛法流布の御誕とされたものであるが、

同牀共殿惟斯鏡

とあつて、我れを觀ること此の鏡を見るが如くせよと仰せられた事と、寸分の違ひは無い筈である。王法と佛法と何の異りもない。今日のやうに世界が命の取り遣りをして居る居る矢先きにあつて、何の信念も修養もせず、何んで國家が保たれやうかい。政治家とか實業家とか教育家とか云ふものも、經世濟民の爲めには、佛法の信仰を扶

植するやうにせなければならぬ。佛は、かゝる動亂の際には、天大將軍となつて鋒刃を振廻す勇兵ともなり、或ひは童男童女婦女の身を現じ、長者宰官小王身を現じて、爲めに説法すと云ふのぢや。

此の不可思議の妙法によつて、國家經綸の衝にあたり、國家擁護の任を完うせねばならぬ。今日、歐洲戰亂の結果は、世界に大變動を來すに違ひない。然ういふことになれば、日本も東洋を背負つて立たねばならぬのぢやで、腰を十分しつかり鍊へて、如何なることがあらうともビクともせぬ覺悟が大事なことぢや。禪道修行者も、其の大きな志を抱いて貰ひ度いものである。自分さへよければと云ふやうでは佛法の本旨を會したとは云はれない。祖師の語録などには、處々に

「鉗鎚を忌む」

と云ふことがあるが飛んでもないことを書いたものぢや。我が黃檗開山の語録にも、其の序文に、其のやうな文句がある。衲は何時も、「削つて終へと矢釜しく云つて居る

が、佛法を行ずるものが、鉗鎚を忌むと云つて度衆生を嫌ふやうでなるものか。道元禪師などは

「自未得度先度他、これ發菩提心なり」

と云はれてあるのぢや。又た大學には、

「明德を明かにするにあり、民を新たにするにあり、至善に止まるにあり」

と云ふてある。即ち、一人のこらず、明かにするでなければならぬ。

「自覺覺他覺行圓滿」

が佛法の究極ぢや。宗教を信ずるの、禪をやるのとばかり云つたところで、何の効もあるまい。闇雲、泥棒は増え、裁判所、監獄は繁昌し、不正犯罪者は跋扈するが、少しは減るやうにならにや、宗教と世間とを別のものにし、禪坐を打して居る時とは別もので御座ると、自宅で夫婦喧嘩をしたり、世間で悪計ばかりして居ては何んにもならぬ。行住坐臥、喫茶喫飯底の語を其儘に呑み込んで、心の欲すところに従つて矩を

踏えず位に思つてる輩が、禪道修行者に割合に多いやうである。夫れぢや、折角の修行も役に立たぬ。我が一切の心身を打ち込んで全き生命を働かせるやうに心掛けて貰ひたいものぢや。寒いから避寒、暑いから避暑、花が咲いたから花觀をしよう、菊が美しい、牡丹が咲いたと、遊んではかり居た日にや、一生が丸で何しに來たか解るまいぞ。何うであらうと、まアお互ひの胸一つぢや。

百丈と瀉山との問答

瀉山大圓禪師、姓は趙氏、諱は靈祐、福州長谿の人ぢや。十五歳の時、本郡建善寺の法常律師に依つて出家されたが、嗣いで抗州の龍興寺に赴いて大小乗の教を習ひ、二十三歳の時、江西に往いて百丈懷海禪師に參して、遂ひに其の奥底を叩き盡くした。後世其の弟子の仰山惠寂禪師と共に瀉仰宗の開祖と仰いで居る偉人ぢや。曾て瀉山が、百丈和尚に侍立して居ると、百丈が、突然、

「誰ぞ」

誰れぢや、と問ひを發した。瀉山曰く、

「某甲」

私で御座ると答へると、百丈曰く、

「爐中を撥へ、火有りや否や」

瀉山は命のまゝに爐中を撥つて曰く、

「爐中火なし」

爐中に火は御座らぬ。かう曰ふと、百丈は自分で起つて行つて深く撥つて少火を得、

此れを夾んで瀉山に示しながら、

「汝無しと道ふ、這箇響」

お前は無いと云ふが、此れは何うだ。響は物を指す貌で、這箇響とは、「此は何うちや」といふ程の義ぢや。火といふものは爐中にばかり在るものか知らん。水の中には無いものぢやらうか。また、夾まれるやうに然ばかり些少な物かしら、空風、火水、木金土、頭上漫々、脚下漫々、溝に盈ち壑に塞つて在ないかの。瀉山は、此一言下に
大悟して禮拜した。

嘘があれやこそ

司馬頭陀が胡南から来て、百丈和尚に謂つて曰ふには、

「頃日胡南に在つて、一山を尋ね得た。大瀉と名づける。是れ一千五百人の善知識を居らしめる事が出来る」

百丈は、これを聞いて、

「それでは襜が行かうか」

陀曰く、

「和尚では不可ぬ」

丈曰く、

「それは何故ぢや」

陀曰く、

「和尚は骨の人である。彼れは肉の山である。設し和尚が居たなら、徒、千に盈ち

まじい」

丈曰く、

「わが會下に住し得る者は無からうか」

陀曰く、

「それでは、自分が、一々、會下の者を観ることにしよう」

時に花林の覺が第一座であつた。百丈は、先づ、これ呼び來らしめた。丈曰く、

「此人如何」

陀、請うて、警歎一聲、行くこと數歩せしむ。陀曰く、

「不可なり」

百丈和尚は、次に、瀉山を呼び來らしめた。瀉山は、其時、典座であつたが、其の入り來るを見るや否や、陀曰く、

嘘があれやこそ

「此は正に是れ瀉山の主人なり」

此人こそ大瀉に住職すべき人ぢやと云つた。此夜、百丈は瀉山を召して、

「吾が化縁は此に在り。瀉山の勝境、汝、當に之れに居すべし。吾宗を嗣續して廣

く後學を度せよ」

と命じ、且つ囑した。花林、之れを聞いて曰く、

「某甲、忝なくも上首に居る。典座、何んぞ住持することを得ん」

丈曰く、

「若し能く衆に對して一轉語を下し得て出格のもの、當に與に住持すべし」

と、乃で、淨瓶（梵語には軍遲、此には瓶といふ。常に水を貯へ身に隨へ用ひて以て手を淨む）を拈じて地上に置き、問ひを設けて曰く、

「喚んで淨瓶と作すことを得ず。汝、喚んで其麼とか作す」

林曰く、

「喚んで木揆と作す可からざるなり」

木揆は木履ぢや。百丈は更に瀉山に向つて問うた。瀉山は黙つてイキナリ足を擧げて淨瓶を趨倒し、サツサと出て行つてしまつた。丈、笑つて曰く、

「第一座、山子を輪却せり」

と、遂ひに瀉山に命じて開山とした。輪は贏の對で、贏は説文に「賈（商ひ）に餘利（儲け）あるなり」とある。百丈和尚が、淨瓶に對する一語を楞蒲（擲つて戲をなすもの）とし、大瀉の住持を賭にしたが、遂うく、花林が瀉山に輪却たといふほどの意味ぢや。山は一山であらう。子と却とは助字ぢや。扱て、袷が、各の一轉語を、都々一を借つて願せうぞ。

花林のを

密と裏から返したけれど

下駄が氣になる雪の朝

まあ坐われ

瀉山のを

嘘が有れやこそ實がわかる

なご、言つては嘘を吐く

百丈和尚が、「喚んで甚麼とか作さん」と擧揚された當處をば如何ん。

はかない野末の尾花でさへも

招けば出て来る秋の月

皆なは合點が行つたかい。

四〇

何ぞ曾て飛び去らん

達磨大師七世の法孫に、南嶽懷讓禪師といふのがあつた。其人の法嗣に馬祖道一禪師といふのがあつて、江西の馬祖山に居られたちや。歴史の傳ふるところによると、

「容貌奇畢、牛の如く行き、虎の如くに視る、舌を伸ぶるに鼻を過ぐとあるから、餘程、變つた風采の人であつたらしいちや。當時、入室の弟子が一百三十九人もあつたと云ふから、道風の一時を風靡せしことが想見れるわい。

或時、此の馬祖道一禪師が、弟子の百丈和尚と共に、春の野原を散歩して居られると、偶ま、野鴨子がバアツと飛び去つたちや。そこで、馬祖は、百丈に向つて、

「これや百丈、彼處へ飛んで行くのは彼れや何んちや」

百丈がヒョイと見ると野鴨子ちや。

「野鴨子で御座います」

何ぞ曾て飛び去らん

四一

「何處へ行くかい」

馬祖の親切が、皆なには了解るかの。此の有難い注意が、百丈には會せなかつた。

「最う飛んで行つてしまひました」

百丈は斯う正直に答へたのぢや。すると、馬祖は、突然、黙つて百丈の鼻柱をギユ
と扭つた。扭られて、

「アイタ、、、、、」

百丈が、忍痛の聲を發すると同時に、馬祖は、

「何ぞ曾て飛び去らん」

何も飛び去りはしないぢやないか。此の一句で、百丈は、豁然として、無始却來の
夢から覺めたのぢやわい。全體、野鴨子に向ふ方にはかり見て居るから、飛んで行
つたの、何處へ行つたのと、餘計な文句が出るのぢやわい。アイタ、、、、と叫んだ者
は誰れが叫んだのかや。其の叫んだ聲の主は誰れぢやい。眞個の野鴨子は其の聲の主

ぢやぞ。ソラ其處にも此處にも、野鴨子は、現在、此席に幾らも飛んで居るぢや。人
々箇々自己の胸中に訊ねて見るが可い。

好雪片々の話

馬祖下百三十九人の龍象中に其人ありと稱せられた龐居士は、衡州衡陽縣の人で、姓を龐、名を蓋、字を道玄といつた。本と儒を立て業として居つたが、後、遂に佛法に歸依した。初めは南嶽の石頭禪師に參じた。居士、石頭に見えて問うて曰く、「萬法と侶たらざる者これ甚麼人ぞ」

萬法とは一切萬法ぢや。山川草木、鳥獸魚蟲、有りて凡ゆる差別界の諸現象ぢや。

その差別界の諸現象と侶たらざる者は之れ何人ぞやと問うたのぢやわい。すると石頭禪師は、直に自分の手を舉げて自分の口を掩うた。此の瞬間に、居士は豁然としたのぢや。其後、江西の馬祖大師に參じて、また、前同様の問ひを發した。大師曰く、「一彌が一口に西江の水を吸盡せんを待つて即ち汝に向つて道はん」彌が彼の西江の水を飲み乾して終ふのを待つて、其時、萬法と侶たらざる者を教へ

てやらう。かう答へられると、居士は、廓然大悟されたといふ話も傳へられて居る。

扱て、居士の得力は尋常底でなかつたが、其家庭が亦た珍しい禪的家庭ぢやつた。

靈照女といふのは、居士の娘である。居士が襄陽に住して居た時に、此の靈照女は竹漣を造つて、毎日、此れを賣り歩き、其れを生活費にあて、居つた。居士が此世を去らんとするや、死ぬならば日中が可からうといふので、娘をして出で、日の中するを見せしめた。娘はやがて家に入るや、日の午に及びしを報ずると共に、且つ、時、恰も蝕ありといふ。父の居士が此れを見んとして戶外に出ると、娘は直ぐに父の座に登つて合掌しつゝ、坐亡してしまつた。居士、笑つて曰く、

「わが娘の鋒、捷なり」

と。其後、七日ほど經つて手を枕にして示寂した。其時の偈が、

但願空諸所有、慎勿實諸所無。

といふのぢや。まことに生死自在なものぢや。

此の龐居士が、薬山惟儼禪師を訪はれ將に辭し去らんとせるや、薬山禪師も、知名の大居士のことであるから、送禮も叮嚀にされ、十人の禪客をして門前まで送らせられた。時、まさに嚴冬、居士はチラ／＼落ちて來る雪を指しながら、

「好雪片々別處に落ちず」

あゝ美しい雪だ。これは、全體、何處へ落ちるのぢやらう。決して、別處ではないぞ。別處でなければ何處ぢや。さア道へ、さア道へ。かう云つて十人の禪客を顧られた言葉の中に針がある。餌を垂れて龍を釣らうとするのだ。風なきに波を起し、雲を放つて龍を招かうとするのぢや。浮かりすると引つかゝるぞ。

時に全禪客といふものがあつて、衆を出で、曰く、

「什麼のところにカ落在する」

然らば、何處へ落ちますか。落處といふ言葉について廻つたから、遂う／＼引つかつた。全禪客の言が終るか終らぬに、居士はビシヤリツと全禪客の横面を見舞はれた。全曰く、

「草々なることを得ざれ」

居士の一掌は慈悲の至りぢや。そんなことで好雪片々の道理が會せられるものか、好雪とか、落處とか、言葉の先きについて廻るからぢや。悲しいかな、此の禪客には此の親切が分らなかつた。「そのやうに魚相しく亂暴なことをなさるな」と大不平を並べた。居士曰く、

「亂暴をするとは何事ぢや。そんなことでお前は禪客面がして居られるか。今に閻

魔王の前へ出た時に閻魔は中々許さぬぞ」

前にはビシヤリとやられ、今度は頭から惡水をぶっかけられた。

好雪片々別處に落ちず、皆は此語が解つたかな。如何に之れを商量するぞ。銘々が全禪客の地位になつてみるがよい。さア何う答へる。全曰く、

「居士作麼生」

それなら居士の意見は何うで御座る。何處までも言葉について廻る奴ぢや。何日ま
でマゴついて居るかやい。居士は斯く言はぬばかりに、重ねてビシヤリと一掌を與へ
られた。扱て曰く、

「眼見て盲の如く、口説いて啞の如し」

眼があつても盲同然、口があつても啞同然ぢや。此の好雪片々たる景色が解らぬの
か。見よ、落ち場が分らぬか。罵倒しながらチャント落處を示して御座るぢや。
雪竇和尚が別に自家の意見を述べて言つて御座るよ。

「初問のところに但だ雪團を握つて便ち打たん」

納ならば好雪片々別處に落ちすと初問を發した時に、イキナリ雪團(雪のかたまり)
を一握り握つて打つつけてやつたであらうに。かう雪竇は云つて御座るが、皆は雪竇
の外形ばかりを真似ても駄目ぢやぞ。

未審し壞か不壞か

僧、大隨(益州大隨の法眞禪師のことぢや、住所を取つて代名詞としたのである)
に問ふ

「劫火洞然として大千俱に壞す、未審し這箇壞か不壞か」

劫火洞然として大千俱に壞すといふ語は、仁王護國般若波羅密多經の護國品第五に
ある偈の一句ぢや。偈に曰く、

「劫火洞然として大千俱に壞す、須彌巨海磨滅して餘なく、梵釋天龍もろくの有
性も尙ほ皆な殄滅す、何んぞ況んや此身をや」

劫とは梵語の劫波ぢや。長時と譯す。長い間といふ義ぢや。此の世界が成立しつゝ
ある間を成劫といひ、成立してしまつて其儘である間(保存されて居る間)を住劫と
いひ、住劫が盡きると漸次に壞れてくる其の壞れつゝある間を壞劫といふ。壞れ盡く

して空に歸した時を空劫といふのぢや。これを成住壞空の四劫といつて、此の四劫は互に循環して居るものぢや。壞劫に於いて世界が壞れる際に、水災、風災、火災が起る。此の火災の爲めに萬物が焼き盡くされて終ふ様子を「劫火洞然」として大千俱に壞す」といつたのぢや。大千は三千大千世界ぢや。

扱て、大千俱に壞すとあるからには、世界の萬物は一つも残らぬ筈であるが、這箇、即ち、本來の面目は壞する者か壞せぬ者かといふのが問ひの意ぢや。隨答へて曰く

「壞」

壞れるよと雜作なく言つて退けたもの、此の壞が無孔（孔の無い）の鐵鎚で、なか／＼の難物ぢやぞ。僧曰く、

「恁麼ならば、則ち、他に隨ひ去るや」

他とは何んぞ、劫火洞然大千俱に壞すぢや。此僧、能く／＼這箇に執着して居ると見える。三千大千世界と俱に這箇も亦た壞するのかと、隨分、問の抜けた問ひを出し

たわい。隨曰く、

「他に隨ひ去る」

前に壞と答へたのも、隨分、手荒な答へであつたが、今度は、一層、手ひどく答へたわい。大隨の答へは病ひに應じて藥を投じたものである。圓悟和尚、これに着語して曰く、

「若し他に隨ひ去ると道は、什麼の處にか在る。若し他に從ひ去らずと道は、又た作麼生」

此のところが肝要な問題である。皆なが此の事を了せんが爲めに骨を折つて居るのぢやぞ。此僧は、二物相對の中に問端を立てのであるが、壞劫を待つまでもなく、劫火は、即今、現に、吾人を焼きつゝあるのぢやぞ。皆なは、決して、他所事と思つてはならぬぞ。

禪は應用が大切

一、特に實際を貴ぶ

禪を修めて、公案が數多く透つた、脱落が出来た、碧巖集、臨濟録が解り、本證妙修の玄旨は斯うく、回互宛轉の妙致は然かくと、道理が詳審に會得せられたのは勿論、大悟徹底の彼岸に到達が出来たとしても、唯だ其れ丈けでは、禪道に於ける博獵者、即ち物識といふに過ぎない。これは一種の翫道者と云はねばならぬ。

すべて何學によらず、應用の大切なることは無論ぢやが、殊に、禪は、實際を貴ぶものゝ中での實際を貴ぶものであるから、就中應用を大切とするのぢや。

二、狹義の自力心

禪の應用が、其の人々によつて一律でないことは亦た無論のことぢやが、その根柢

となるものは、自力心の涵養にあると老衲は思つて居るぢや。佛教を聖淨の二門に分けると、禪は聖道門に屬し、眞宗などが淨土門に屬する。聖道門は自力を旨とし、淨土門は他力を旨として居る。其の自力門の中にあつても禪は自力の純なるものぢや。寸毫も他力の分子を含有しない。それで、自力と云つても、狹義の自力と廣義の自力とがある。單獨で遣り通す、決して他人の世話にならぬと云ふ意に看るのが狹義の自力ぢや。狹義の自力は、稍やもすると、極端の孤立主義、一種の偏窟主義に陥り、完全なる自力とは云はれぬぢや。

自力は、少くとも三つの意義を包含して居る。即ち、

信念、勤勉、勇進

が是れである。禪を修めんとする人は、堅牢なる信仰心を有せねばならぬ。克く勤め克く働き、倦惰、横着などの念は些かたりとも起してはならぬ、大勇猛心を奮ひ起し古彦を下視し慕過する如き偉大なる精神を養はねばならぬ。禪に於ける古來幾多祖訓

祖典の意を實際的に縮約し來れば、必ずや以上三義の中に歸藏するぢやらう。自力心とは此の三義を合はせたものぢや。狹義の分を初步の自力心と云ひ得るなら、廣義の分は高等の自力心とでも謂はふか。

三、廣義の自力心

廣義の自力心こそ、實に吾々の守り本尊とすべきものぢや。空劫已前の自己とか、本來の面目とか云ふものを、強ひて實際的權化せしめたならば、高等の自力心（即ち廣義の自力心）とでも名づく可きものぢや。世の中は一方から見れば苦の世界で、一方から見れば樂の世界で、また一方から見れば苦樂相半ばした世界にも見える。が、人間に欲望のある間は、——欲望の無き者とすれば其れまでなるも——公平に觀察するに如意よりは不如意の方が多いやうぢや。泣事ばかり云ふのも嗤ふ可きことぢやが、無暗に樂天を唱へるのも瘦せ我慢と云はねばならぬ。其に中道の理ではあるまい。唯

だ其の不如意に克ち、逆境に屈せず、痛苦に堪へ、百折不撓、千頓不退、以て素志を貫徹するは、信念、勤勉、勇進の三者、即ち高等の自力心のみ能く之れを成し、之れを完からしむるのぢや。信念、勤勉、勇進の三者中でも、信念は特に守り本尊の腦髓となつて居るものぢや。

禪の功能

一、法を求めて懈らず

何んでも功能書を讀まねば安心が出来ぬと見える。然し、同じ功能書でも誇稱の言なきに非ずだぞ。病氣に罹つて薬を買つて服んだが、功能書程の驗もないと云ふのは、是れ薬の正物でないからぢや。禪はそんな山師の賣薬とは天地懸隔、功能書を示さうと示すまいと、禪の薬に偽物は御座らぬ。がぢや、是れも放散らかして置けば、微も生へ、氣も抜けて功驗はない。日々、服用して初めて身心の健全が得られる。禪は定薬ぢや。維摩經にも「法を求めて懈らず」とあつて、其の註に羅什は斯う云ふて居る。「法を求めて勤めざれば、果報未だ應せず、即ち邪見を生じて、所得なしと思へり、是故に行者法を求めて懈怠せざれ」と。

粉で丸め、水で溶かした病薬でも、續けて服さねば一服全愈といふ譯には參らぬ。況して煩惱妄想に攪亂せられ、不善意不善行といふ恐ろしい無形の悪病に罹つて居る奴が、法薬の功能書なんぞを漁り讀み廻して、心病退散が出来るやうに思ふて居るとんでもない了簡違ひぢや。

二、行じくへ行じ抜け

禪道の法薬は、日々、喫茶喫飯時、運作轉動の間も服用して行かねばならぬ定薬ぢや。夫れも知らずに、禪は禪僧の飯種ぢや、あんな氣違ひ染みた眞似でもせなければ、鼻の下空殿の建立が出来んからなア、僧は佛を喰ふといふのは此處の事ぢやと、罵る奴があると云ふ。とんでもない話ぢや。夫れでは御奴等の口にも食へまいぞ。禪薬は、夫れ、人間日用の常食とし、常服とすべきものである。行住坐臥、喫茶喫飯の上にも禪法ありと云ふは、此の定薬の功能あるところなんぢや。是れを懈つて何が功能ぢや、瘡患者やうの薬鑑行者とも謂つべき、忽ち熱上し、忽ち冷下するやうな志操で

は、却つて邪邊の果報こそ獲得め、禪の法薬はそんな根性骨で成就てる行ぢやない、日用光中、坐作進退の上に、行じ行じ行じ抜くところに、此の功験はあるのぢや。然らば、其の定劑は何處で賣つて居るか、禪學會の專賣だらうか、提唱會の却賣りであらうか、禪寺の小賣りか、禪僧の行商か、買ふに處なし、禪の法薬は買はずとも、各々自己に所有してある、製造元は己れぢや、問屋も小賣店も自家でやつて居る。然し、各自が、製造元ぢやと云ふても、品に異りはない。粗製亂造をやるやうな不徳漢は何處にも居らぬ。老衲の店で有つて居るのも、諸人の家に有つて居るものも、功能に變りはない。皆な眞物ぢや。只これを行ふと行はざるににある。勤めて懈怠せざれば、功能は日に日に顯はれて来る。自家の確立は勿論、衆他の爲めに利し、自他共に福を受けて限なく、無病息災で、圓滿頌全な暮しが出来やうといふものぢや。

三、何ぞ解脱を求めんや

本來から云へば心病なんと云ふものはない、只禪法の妙薬を等閑にして是れ日用自家薬籠たることを認得せないからぢや。三祖僧璨大師が御師匠の惠可大師に對して、「弟子風恙に纏はる、請ふ和尚罪を懺し玉へ」と願はれた、其の時二祖は「罪を持ち來れ汝が爲めに懺せん」と、三祖曰く「罪を覓るに遂に不可得」、二祖曰く「汝が爲めに懺悔し竟る」罪と云つて別にある譯のものぢやない、罪過は心病ぢや、禪法の效験がなところぢや、四祖がまた師匠の三祖に對つて「願くば和尚慈悲請ふ、解脱の法門を與へ玉へ」と云はれた時に、三祖の云はれるには「誰れが汝を縛す」と、四祖曰く「人の縛するなし」三祖曰く「何ぞ更に解脱を求めんや」と。繫縛の束縛のといふ其んな者は有はしない。本來解脱である、法薬は其のまゝ損せずして功能ありぢや。

眼は眼を見ざれども眼の功能あり、指は指を見ざれども指の作用は自由ぢや。刀の刀を見ず、水の水を見ずして、刀は刀の功能、水は水の機能を顯はして居るではないか。老衲の禪薬服せざれば諸人に功能顯はれざるにあらず、御詔への功能は各自に顯

まあ坐われ

六〇

はし得るのである、此處が銘々の工夫したところぢや。夫れでも功能なしと云は、九十九夜さも通ひ詰め、僅か一夜の大雪に、凍へ死ぬとは、小將たらずでないかのう。

と謠に、弄されて、最も好く似着はしい話ぢや。日毎日勤め懈らざれば功能は靦面ぢや。

山僧大姉に論破さる

修業中の失敗談？、要まり小僧が若い雲水時代には、面白い失敗談があらうと云ふのか。それは幾らでもあるのぢや。血氣盛りの向ふ見ずの時には、誰れしもある譯ぢやが、殊に山僧には人一倍あつたかも知れぬ。併し、何んでも構はず話しても仕やうが無いぢやないか。幾らか聞く人の爲めになるやうな、學人の参考になるやうな話でなからにや、それや駄目ぢや。兎に角、若いものには爲めになることぢやと思ふて話をしても、却つて悪いところばかり真似て、爲めにならぬやうな事になり易いものぢやで喃。

何んぢや……うむ彼の話か……彼れは斯うぢや。山僧が伊豫大洲の龍護山樵禪和尚に隨侍して居つた時の話ぢや。樵禪といふ和尚は、至つて衆生縁の深い方で、此の和尚のところへ參禪に来るものには大姉が多かつたものぢやから、實際を知らないもの

は、種々な憶測を廻らして一時悪い評判を立てた事があるのぢやが、決してそんな馬鹿な事はない、而して其大姉共の中には仲々容易ならぬ俊潑の機も居たのぢや。

或日、山僧が、それらの大姉たちの中で、斯う云ふことを云つたことがある。それは、

月も日も漏らさでくら樹庭の面に

しげる一木のたま柏かな

と云ふ歌があるが、これは、多分、瑞榮尼が詠んだものだと思ふて居るが、實に徹底了也ぢやと云ふと、直ぐ其處に居つた橋爪新五兵衛と云ふ人の妻が、お前さんは非常に其歌を珍重がつて居るやうぢやが、そんな事ぢや迎も此事を領得することが覺束ないと云ふから、それや又た何う云ふ譯ぢやと反問すると、イヤ瑞榮尼は仲々豪い尼さんぢやと聞いては居るが、「月も日も洩らさでくら樹」と云へば、未だ相對的に樹と云ふものが在るぢやないか、ぢやから下の「しげる一木の玉柏かな」と相並んで、眞の光明を認め得たものぢや無い、と仲々氣焰が猛烈ぢや。山僧も之れには大に弱つて、

ぢやドウ訂正すれば可いのかと云ふと、其大姉は益得意になつて、それや何んでもない、斯う云ふ風になほせば可いのぢや、

庭の面において輝く玉柏

千里の外もてりわたるかな

之れぢや、之れでなからにや、眞に大事を領得した人の歌とは云はれん、眞如の輝く玉があるから、千里の外迄照し盡さる無き底の働が生ずるのぢや。と云ふ山僧も斯う一本やられて、面前香爐子笑ひ囁々の感がしたのぢや。イヤ實にこの失敗は山僧に大なる活教訓を與へたのぢや。

禾山和尚と山僧

一、寝て許りゐる變な坊主

禾山和尚と衲は同年ぢや。衲は最う今年七十九になるが、未だズツと若い時、何んでも二十四位の頃、豊後の杵築の養徳寺の結制に行たところが、衲の眞向ふの單に、病氣だくと云つて何時も病室にばかり、ごろ／＼して居る坊さんがゐた。衲も變な坊主だわいと思ふてゐた。それが今の禾山和尚ぢや。或る日、齒が痛むたことがあつた。その時、南隱和尚は隣單に居つたが、もと醫者であつたから、いろ／＼と藥など拵へて呉れたが少しも治らない。仕方がないから暫らく引込むこととして、病室に行つて見ると、五百人からの大衆のことだから、三四十人の病僧が一杯になつて寝てゐて寢先が無い。やつと少し隙いた處を索し出して寝ると、すぐ其の側に先刻の變な坊

主が寝てゐるのぢや。衲はこの坊主の正體を一つ見届けてやらうと思ふて、「お前は何處ぢや」と試にやつて見た。すると「伊豫ぢや」と答へた。「伊豫と云ふことは單の張出して分つてゐるが、伊豫は何處ぢや」「宇和島ぢや」「では金剛山ぢやないか」「さうぢや」そこで衲もハタと膝を打て「それで分つた、變な坊主だ、變な坊主だと思ふて居つたら、教學の金剛山ぢやから、坐禪も獨參もせず、寝てばかりゐるのぢやな。でも惜い歳月を費すぢやないか」と云つたら、向ふの云ふことにや「お前が尼僧のやうに見えるぢやに依つて、何でも是れは尼僧が男僧に化て僧堂に這入り込んでゐるに違ひない、實にキビの惡い尼僧ぢやと思ふて居つたわい」と。互に笑つたことぢやつたのぢや。

それから、衲が、「お前も宗門の爲め眞實に修行して、決して文字法師となつてはならぬぞ」と云つたら、「然らば一つ問ふことがある。如來禪と祖師禪と何れ丈けの差があるか」と云ふので、「差別するものは勝手にせい、達磨は全體だれの子孫か、これを

明むれば自ら分明ぢや」と答へると、「麼んな事ア誰れでも云ふことぢやが、其れでは分からぬ、もちつと分明に道へ」と追求するのぢや。これは其もの、棒で其ものを打つに限ると考へて「それではお前が一番得意の經を講義して見ろ、俺が教へてやる」と云ふと、「病僧が麼んな事すると罰を受くる」と云ふから、「何も仰山に講經ぢやなどと、改まつてやるには及ばん。只の話のやうにやれば可い、今は一大事の爲めにやるのぢやから、そんなこと云つてゐられん」と云ふと、「そんなら心經にすすから心經を書け」と云ふ。それで袈裟文庫から半紙と矢立を取出して書いた。ところが「これは不思議ぢや。坐禪坊主に心經を間違なく書く奴は居らん筈ぢやが」と云ふ。「當會では唐音だが衲は吳音で平素讀んで居たから、忘れた處は兩方から考へ出したのぢや」と云ふやうな譯ぢやつた。それから和尚が、衲の書いた心經に注を入れやうとするから「止せ止せ」と止させやうとすると、「俺が讀んでも、注が無いとお前に分るまい」と云ふから、「分つても分らんでも宜い、今日はお前から教はるのぢやない、俺がお前に如來

禪と祖師禪の差別を教へるのぢやないか、お前はドン／＼講義して、俺が問ふ時答へさへすればよいのぢや」と云ふたら和尚も仕方なしにいよく始めることゝした。さあ然うなれば聞きたいのが人情で、罰を行ふ奴、警策は持ち乍らそつと後の方に來て聽いて居るのぢや。講義が段々進んで、色即空に來た、「色とは形あるもの、空とは形なきもの、元來この色、空の二つは別物ではない、二にして一、一にして二、故に即の字がある、有形即無形ぢや。依て色不異空、空不異色と云ふ異らずは其意味を強めたまでぢや」と。そこで衲が突然、「止せ、それで宜しい」と云ふと。「止せなら止すが、止せば何うなる」と云ふ。恰度、其時、或る信者から澤山な團扇の施しがあつて、一人に一本宛配られたのぢや、そこで其團扇を拈じて「色即是空、色の團扇は今こゝに持つて居る、そつちの空をこつちに遣して見ろ」と云つたら、流石の禾山も黙つて暫く考へ込んで居る。それで衲が「今經論を調べて何にをして居たのぢや、麼んなところに疑議するから、如來禪ぢや、祖師禪ぢやと云ふやうな差別が出来るのぢ

や。達磨は釋迦の兒孫、初めから歴んな差別があるもんか」とやつたら、禾山「成程さうか、成程さうか、それで合點が行つた」と喜んだのぢや。

それで衲は又た「伊豫から海を越えて何の爲めに一體此處に來たのぢや」と云ふと、「師匠は行くに及ばんと出して呉れさうでなかつたが、行つたら法式くらゐは覺えやうと思ふて、實は形式だけの見物に出て來たのぢや」と答へた。「折角來たからには形式だけでなく、内容も兼ねて見物したら何うぢや」と云つて見ると、「成程……さうすることに決した。お前は今ま誰れに隨身てるのぢや」と問ふ。「柳川福嚴寺の獨唱和尚に」「然らば俺は誰に隨身たら宜からう」「當會にも澤山歴々の宗匠があるが、蘇山が師匠ぢやからな」「それは一應尤もぢやが、接化の仕方も種々あらう、俺の性格に最も適したものを選んで呉れ」「それは可かん、學徒の目で歴んなこと云へば、人我の見に落つる」「俺の浮沈に關することぢや、是非ども道へ」「歴んなら仕方がない、蘇山は年寄だから稍もすれば老婆風が出るかも知れん、羅山は弟子だけれど、若くて元氣だから、

機鋒峻烈で宜いかも知れん」「實は俺もさう思ふて居つた。ぢや、それにしよう。梅林寺は福嚴寺から僅か五里くらゐなら彼地に行つてもお前とは時々逢へる」と互に將來の辨道を樂しんで居る中に、早や解制となつて、禾山は直ちに久留米に向つて出立し、衲は一應郷里小倉に歸ることとなつたのぢや。

二、思はざる途中の邂逅

それ以來、世の中は騒々しく成つて、長州では外國船を打つ。小倉にも打てと迫るが、小倉は幕府の命が無いからと云ふので聽かぬ。さうかうする中に御老中が下つて長州征伐と云ふこととなる。イヤもう大變なことぢや。山僧は小倉藩擊劍の師範役青柳彦十郎の二男ぢやが、さうなつて來たので、兄弟親戚共がよつてたかつて、男は皆な戦に行くから、出家のお前は國に居て是非親戚一同の取締をせにやならんと迫るのぢや。山僧も仕方がないから、郷里に止まつて、福聚寺文常和尚の處に通うて修行

することとしたのぢや。

此の文常和尚は機鋒峭峻で、鬼文常と諱名のある豪傑であつた。この和尚が兼務して居る寺が四つ程あるが、和尚は其の中の一一番小さい寺に住つて居るのぢや。そこで他が大きな寺に移つて小さい方は禪堂にしてはごうぢやと勸めても聴かない。それは不可ん、師匠最後の約束に背く、師匠が最後に臨んでお前は今迄のやうに人を打た、いて歩く積りか、水清ければ魚住ます、凡聖同居、龍蛇混雜でなければならぬから、今迄のやうな遣方を止めることが出来ぬなら決して大寺に住んではならんと云はれた。祈は、其時、生涯人を打た、いて歩きたいから、小寺の外には決して住まぬ、座右常に托鉢袋を離さぬ覺悟を致しますと約束したのぢやと云ふのぢや。

文常和尚は山僧に貴様は身體が弱いのに毎日通つては大變ぢや。此の中の一ヶ寺に住職して修行したが宜い、サーコイ、サーコイと云ふて山僧を引つぱつて檀中を連れ廻つた。それから檀中の者共に、寺はあつても肝心の食べ物が無くてはならぬ、お前

は米を持つて来い、お前は味噌を持つて来い、お前は何を持つて来いと云ふ風にして、スツカリ支度も出来上つたのぢやが、さうかうしてゐる中に愈よ戦争は始まつたのぢや。それで今の伯爵の尊父を始め老人は肥後に預けられる。山僧は菩提所の弟子ぢやから御位牌を持つて肥後に行く、郷里は上や下への大混雜を來したのぢや。それやこれやで、とうとう筑後には行けず、禾山和尚との約束も果すことが出来なくなつたのぢや。

愈御維新となつて、本山から知客寮に入れと呼出しが來たのぢや。元來、本山の知客は、轉衣以上のものでなからねば出来ぬことになつて居る。然るに山僧は中津法華寺の黒衣の一住職に過ぎないから、之を斷つたのぢやが、凡てが改正になつて人才擢の世の中ぢや、ごうしても上て来いと云ふて來るので上つて見れば、本山は幕府建立の寺だと云ふので潰せと中々矢ヶ間敷い、そこで山僧は本山は成ほど幕府の建立だ、けれども開山を迎へることから凡て後水尾天皇の詔を奉じてやつたことだから、社

寺係じがかりに行いつて大おほいに議ぎ論ろんをしてやらうと思おもふて出で掛かけたのぢや。すると其そのの途とち中ちゆう「柏はく樹じゆさんぢやないか」と笠かさを取とつて呼よび止とめた雲うん水すいがあつたのぢや。だれかと思おもふて善よくく見みれば、それが今いまの禾くわ山ざん和わ尙しやうぢやないか。

三、それ切り音信不通

「これは珍めづらしい、禪ぜん哲てつさんぢやないか、何ごうして此こゝ處いに……」と云いふと、「わしは解げ間あひ々くには屹きつ度た福ふく嚴げん寺じへ行いつて、モ一く來くるか、モ一く來くるかど、お前まへばかり待まちつて居ゐたのに、さうく來こなかつたが、一たい體たい何ごうして居ゐたのぢや」と云いふ。「それは何ごうも濟すまなかつた。實じつはわしも柳やなぎ川がはの方ほうに行いきたいくど常つねに思おもふては居ゐたが、何なにしろ郷やう里りは、あれから直すぐに上うへを下したへの大おほ騷さう動どうで、自じ分ぶんの儘ままにならぬので、實じつに殘ざん念ねんではあつたが……斯かく々くかやうにして今いま本ほん山ざんに來きてをるのぢやと簡かん單たんに話はなすと、「さう云いふ譯わけであつたか。それは兎うに角かく、今こん晩ばんわしの處ところへ宿とどつて呉くれれ、一べつ別べつ以い來らいの話はなが山やまほど積つもつて

居をる、ゆつくり話はなさうぢやないか」と云いふから、「今いまま何どこ處いに居ゐるか」と聞きくと、「相さう國こく寺じに居をる」と答こたへる、「そりや又またた什ずうして掛か搭たふしたのぢや」と云いふと、和わ尙しやうも涙なみだぐんで「羅ら山ざん和わ尙しやうもさうく遷せん化けさつしやつたのぢや、わしは其そのの病びやう床しやうに待まちして、看かん護ごして居をつたが、その今いまはの際きはに臨のぞんで、行ゆく末すえのことなごも考かんがへたので、若もし和わ尙しやう百ひゃく年ねんの後のちには誰たれに參さんじたら宜よからうかと、尋たづねると、和わ尙しやうは言ごん下かに、相さう國こく寺じの越あつ溪けい和わ尙しやうの處ところへ行いつて云いはれたのぢや。その因いん縁ねんで和わ尙しやうが遷せん化けさつしやるや否いなや、袈け裟さ文ぶん庫こを掛かけて相さう國こく寺じへ來きたのぢや……詳くわしい話はなは後あとでするから、兎うに角かく、わしの處ところへ來こい、今日けふは、わしの爲ためには非ひ常じやうに都つ合がふの宜よい日ひで幸さいぢや、明あ日すからは出で來きないから、さア往ゆかう、さア往ゆかう」と歩あり掛かけるから、「まア待まちて、實じつはわしも、お前まへの處ところへ宿とどつてゆつくり話はなしたいのは山やま々くぢやが、わしは、今いま、本ほん山ざん存ぞん亡ぼつの關せきヶ原げんを控ひかへて居ゐるのぢや、今いまま其そのの急きふ務むを帶たびて社しゃ寺じ局きよくに出しゅつ頭とうする途とちゆう中ちゆうぢや。本ほん山ざんの方ほうでは色いろを蒼あをくして、わしの歸かへるのを待まちつて居をるのぢやから、私わたくしの用よう事じで事ことを後おくらす譯わけには行いかぬ。又またた時じ

節もあらう程に、残念ぢやが、今日は之れで別れよう」と云へば、和尚も「さう云ふ譯なら仕方がない、誠に残念千萬ぢやが、又の因縁を待つ事にしやう」と袂を別つたやうな譯ぢやつたのぢや。

山僧が、東京に初めて上つたのは明治五年ぢや。それは教部省から、各本山の當局者の上つて來いこの達しが出たから、山僧は本山の執事として上つたのぢや。其時、禪哲も來て居つたが、何分、お互に用事は多いし、ゆつくり逢つて話も出來ず、それかど云つて教部省の中では話さうと思ふても思ふ存分の話も出來なかつたのぢや、うむ、或時斯う云ふ事があつたのぢや、禪哲が山僧に、「肉食妻帯勝手次第だとか、何だとか譯も分らぬ事を教部省の役人共が云ひ出すが、各宗管長は無論そんな事を受けはしまいが、そんならくでもない事を云ふ役人共の話は聞きたくないから一緒に歸らうぢやないかど云ひ出したが、山僧は、「イヤわしの本山からは、わし共に三人來て居つたが、其中二人は歸つて今はわし一人残つて居るばかりぢや、然るに此の矢ケまし

い最中に其の一人残つて居るわし迄歸ると云ふ譯には行くまいと云ふやうな次第で、今ま暫らく留まる事とした。それで禪哲も留まつて居つた。そうかうする中に十月五日の達磨忌が近まつて來た。山僧は此の達磨忌には是非共献香せねばならぬ事になつてゐたので、一先づ歸ることゝした。そこで感じたまゝ、

みゝしろに残しゝくつの片足も

歸るいへちをふみかためつゝ

どの一首を詠むだのぢや。何分ふみかためつゝあるのに、譯の分からぬ役人の奴共は、かくでもない事ばかり云ひ出して、我が佛教界を騒がせるが、此の先き何うなることかど、心配もし憤慨もしながら歸つたのぢや。其の時、禪哲にも、何ぞか歌を残したやうぢやつたが、エ、……またあはぬ別れならんと思へども、……エ、……年を取ると物覺へが悪くなつて……エ、……何ぢやつたか忘れてしまつた……其時代は今のやうに交通便利な世の中ぢやないし、殊にお互に用事が多かつたので、一度別れて中々再

び逢ふと云ふことは容易ぢやなかつたのぢや。それ切り今迄一度も逢はぬのぢや。ぢやから禪哲が有名な禾山のことぢやと云ふこともズツと後になつてから知つたくらゐぢや。

其後、山僧は盲目や啞の學校に關係するやうになつたのぢや。これは何にも衆生濟度ぢや、何でもかもはぬ飛込んでさへ居れば悪いことはないと考へてのことぢや。其中に、何でも山岡か誰れかの心配で、南天棒が牛込の道林寺へ來、南隱和尚は谷中の全生庵に來て、提唱を始めて大に我道を鼓吹して居つたが、或時、此の二人が一緒に山僧を訪ねて呉れたのぢや。其時、山僧が「此頃禾山禾山と新聞によく見ゆるが、あれは一體誰れぢや」と問ねると、「あれか、あれは伊豫の禪哲のことぢや」と云ふ。それで山僧は始めて禪哲が禾山となつたと云ふことを知つたのぢや。

其後、新聞を見て居ると、「禾山が全生庵に來て一週間參禪を聞く、本日着」と出てゐたから早速往つて見ると、未だ來て居なかつたので、名刺を置いて歸つたのぢや。

其れから又た直ぐ往つて見る筈では居たが、頗る取込んだ用が出來て出られない中に、とうとう禾山は歸つて仕舞つたので、甚だ残念に思ふたが致方がない。それ切り音信不通ぢやが、今たつしやで、大いに道の爲めに盡力して居ると云ふことを聞いて、山僧も非常に嬉しいのぢや。

或時、大石正己の邸で、山僧が從容録の提唱をやつたが、其時は河野廣中、加藤政之助、箕浦勝人など、何んでも政治家連中ばかり集まつて居たやうぢやつた。河野は禾山の證明を得てをるとか云ふ話ぢやが、山僧が此話をしたら、その河野が、「成程、それと同じ話を禾山から聞いて居る。あの時柏樹和尚に逢はなかつたら一生經讀み坊主で終つたらうと云つて居つたと話して居たのぢや。」

山僧も、時勢後れで、其上、斯う年寄つてはもう駄目ぢや。宗演和尚などは運好く始めから宗匠揃の相國寺でしつかり修行もし。時勢に適するやうに學問もして居るし、若くて元氣で大に活動して居るやうぢや、尙ほ此上共、今後は我道を一身に背負つて

まあ坐われ
大にやつてもらおう積りぢや。

禪定三昧

一、清風自ら禪床を巡る

暑さは毎年の事ぢやが、今年は格別暑いと云ふて、来る人も来る人も愚痴を云ふ。愚痴を并べたからとて、所詮、暑熱は退散するものではない。暑い時には懸命に仕事をするか、下腹に力を籠めてウムと一番坐つて見るがよい。老衲の所にも、近來、大分、坐禪に来る人がある。一寸ひやかに来るのかと思ふと、イヤ中々熱心ぢや。餘り一生懸命に坐つてばかり居るから、それではいかん、坐禪の方法としても、又、身體全體の上から云ふても、經行と云ふことが大切なので、此處は本堂が狭いから庭園を一巡するがよい。と云ひ聞かせても其の時間が惜しいと云ふので唯だ純一に坐つて居る。今も二三人居るが其の熱心なことは僧侶の遠く及ばぬくらゐ、學校の職員も居

まあ坐われ

八〇

れば、休暇中の軍人も居る。彼等の端坐するところ、清風自ら禪床を巡るといふ有様ぢや。

現代の有様を見ると、一部分の人は斯く熱心に法を求め、道を修行して居るに拘はらず、一般から云へば或は避暑ぢやの避暑ぢやのと騒ぎ廻ると云ふ話、そんなにしてまで自分の身體がいけなくなつたのかと思ふと心細くなる。襦は八十二の今日までそんな真似は一日でもした事はないのぢや。

二、純一に修業三昧

最も、襦の修行時代は多く九州に居つたので、東京よりも一層暑い、ビリ／＼照て居る市街や村落を托鉢して廻るのが半日の日課ぢや、托鉢から歸つて來ても足を洗ふと直ぐに僧堂に駆け付けて坐る、汗を拭ふて居る暇もない。況して風通しの悪い僧堂内とて坐ると同時に玉の汗が遠慮なく顔や手足に流れ出る。無論衣類も袈裟も法衣も

汗みぢれ、それが搾るやうに出ると、妙なもので、却つて、氣持がよいものぢや。汗が出ないと何んだか不足なやうな氣がしてならなかつた。前に坐つて居る人を見ると流れ出る汗の間から蚤や虱が這ひ出て來る。いやはや今日の青年には話をしても眞實にはなるまい。不潔を自慢にして居る譯ではないが、何を云ふにも、出ては托鉢、入つては坐禪、洗濯をする暇も無ければ、又た其の當時の雲水は、そんな事に頓着なかつた。唯だ純一に修行三昧で、自身の衣服などは氣にするものは殆んどなかつたのぢや。また、夫だから、修行が出來た。今時の雲水には、此の氣概は全く見ることが出來なくなつた。却つて、在俗の人々に熱心家があるのは妙な現象ぢや。

三、永福寺の鬼文常

襦の師家は、當時、臨濟に有名なる鬼と謂はれた文常老漢で、宇佐の永福寺に住して居た。老漢は懶翁と云ふて、漢方醫をやつた面白い人であつた。其の接得は峻嚴無

類といふ有様であつたが、其間には牛馬の病氣を治してやつたり。時には人の病氣をも診てやる云ふ風で、中々親切な人で、後には多くの信者が生佛と崇めて居た。和尚の信者に面白い酒屋の爺さんが居た。この爺さんに孫があつて、其孫が、酒屋のことで大釜に湯を沸かして居た時、どう誤つたか、足を踏みこらせて其中に落込んだので、家内中は大騒ぎ、醫者は、生憎、村の中に居ない。そこで、文常老漢の所に馳せ込んで、子供一人の命にかゝはる大事件ぢや。早く来て治療して呉れと云ふ頼み、老漢イヤぢやとは云へぬが、さりとして適當の妙薬も知らない。兎に角、云はるゝまゝに酒屋に行つて見ると、上を下への大騒動、そこで先つ大桶に冷水を一杯杓み込ませ、泣き叫んで居る小兒を無理矢理其水の中へたゝき込んだ。爲めに水腫れもなく漸次快方に赴いたと云ふので、其話は近郊一體に擴まり、遂に傳染病患者まで頼みに來ると云ふ有様、老漢、斯うなると致方がないので、何か白紙様のものを與へる、それが又た妙に効果があるので、一層の繁昌を見るに至つたのぢや。或日のこと醫者がやつ

て來て、和尚さんのお札の方が自分の薬以上に効能がある、一體如何なる處方であるか、それを内密に聞せて貰ひたいと云ふ頼みであつた。老漢カラ／＼と笑つて、「あの札か、あれの秘方を傳授するから見なさい」と云ふので、白紙を切りて中に竹を一本挿して患者に與へるのだと教へた。それでも信仰の方は恐しいもので、大抵の病氣はそれで治つて了ふのぢや。

或時の如きは、力士が骨を痛めたのすら、このお札で奇麗に治つたことがある、そして、幾らお禮を持つて來ても、禰は醫者ぢやない。お禮を貰つて人の病氣を見るのは嫌ひぢやと云ふので、何を持つて來ても受け付けなかつた。思へば偉い和尚ぢやつた。私が隨身したのは宇佐の永福寺に居つた時で、禰は廿三四歳の時分であつた。尤も顔を知つた居たのは十代頃からであつたらう。沖津の清見寺明機和尚の會下に居つた時分は同參であつた。其の當時の雲水は、前云ふ如く風俗などには一體關せぬ方であつたが、特に文常老漢はいつでも破れた麻衣一枚で且過寮に居た。其頃から一同が

老兄と云ふて敬意を拂つて居たぢや。全く、此時の老漢は、夜中と雖も一睡もせず、終夜坐禪をして、心性徹見に努力して居た時代で、其の修行も猛烈なものであつた。

四、水清ければ魚棲まず

文常老漢は其の力量に於て第一流であるに拘はらず、決して大地名藍を望まず、常に貧寺に住して満足して居られた。人あり其の何故なるかを問ふと、師家の誠めぢやと云ふて居たよ。老漢の師家とは、有名な阿波の春叢和尚の事で、春叢和尚は文常老漢の餘りに機鋒峻烈なるを見て

「お前は、一生、大地名藍に出るなよ、大地に出ては、必ず、多くの坐下を接待すること出来ぬ。昔から水清ければ魚棲まずで、清貧に甘んずる所に却つて天下の雲霧が寄る」

と云はれた其の言葉に契を立て、一生、大坊には住職しなかつた。

小倉の廣壽山福壽寺と云ふは、藩主小笠原家の碑寺で有名な寺ぢやが、或時、小笠原家の法事が、一週間、寺に於て營まれた。何日も貧乏をして居るから、文常老漢をも呼び寄せたらと云ふことになつて来て貰つた。例に依り破れ衣に破れ袈裟、瓢然とやつて来たが、日中は大衆と共に讀經をして居るが、夜は必ず深更に起き出で、丈室に坐禪するのであつた。

或夜、非常な音響が四邊の静寂を破つて聞へた。何事かと思ふと、老漢坐禪の歸りに暗中のこととて柱に頭をイヤと云ふほど打つたのぢや。此時ばかりは顔から火が出たぞと後で話された。

南天棒と訥とは二つ違ひの兄ぢやが、彼れも老漢の痛棒を喫した仲間ぢや。老漢は途中で出逢ふと誰とでも商量をする。そして、側に河でもあると、河中に投げ込んだで了ふと云ふ悪辣の接待であつた。南天棒なども投げ込まれた仲間ぢや。南天棒も入寂式をやつたと云ふが、生きて居る間に葬式をやつたのは、前に話した酒屋の爺さん

に初まつたので、その時、文常老漢が引導を渡した。

老衲は老漢の會下を離れて豊前中津の在に空寺のあつたを幸ひにして居ると、老漢は態々尋ねて来て呉れた。寒中であつたから、非常に寒い、幸ひには戸もなければ疊もない。衲は關はぬが、老漢のために一枚の毛布を借りて来たが、どうく敷かなかつた。夜は一枚の蒲團に一所に寐て、衲の道業を勵まして呉れた。其お蔭で元來弱かつた衲は非常に強健になつて今日まで生きて居る。其の當時の事を思ふと誠に難有い。生きて居る間にお互に大法の爲めに働かねばならぬのぢや。まア氷水でも上りなさい……。

黄檗の禪風

一、念佛禪の眞意義

禪三派の中でも、我が黄檗宗が、臨濟宗や曹洞宗と異つて居るのは、平生、念佛を唱へることである。黄檗山では、巡照といふ役があつて、朝起きる時と、夜寝る際に、諸寮を巡つて、次の様な怡山禪師の願文といふのを唐音で誦む、
謹白大衆 生死事大 無常迅速 各宜醒覺 慎勿放逸
それから、各寮の前にある版を六つづ、打つて「典座師」とか「侍者師」とかいつて寮主を呼ぶと、それく

阿彌陀佛

と答へる、凡て挨拶を念佛でするのである。巡照といふのは、各寮を巡つて參學の

ものを回光返照せしめ、即ち、生死事大無常迅速なることを顧念して、須臾も修行を怠らぬやうに勵ますのである。黄檗山の巡照といへば有名なもので、昔は黄檗山に數千人の僧侶が詰めて居たから、普通の寮舎丈では足りないで、鐘樓にも、伽藍堂にも大勢寢起をして居たものぢや。それを七番巡照といつて、一晚に七度びづゝ巡つたから、殆ど、終夜、巡照の版の音が絶へない程である。有名な大泥棒の日本左衛門が捕縛された時に、俺が、一旦、這入らうと思へば、どんな嚴重な戸締りがしてあつても必ず這入るが、黄檗山丈けは、あの巡照が仕切りなく巡るから、何しても、這入れなかつた」といつたといふことである。

本堂で讀經する時にも、中央で誦んで居たのが、東の堂や西の堂へ移つて讀經する様な場合に、僧侶は皆な小さい木魚を打つて

「南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛」

と念佛しながら歩く、元の位置へ歸る時も同様である。又た昔は、時計がなかつた

から、時間を計るに、黄檗山では凡て線香を用ひた。現今でも其の風が残つて居て、毎朝、典座和尚が禪堂の聖僧へ御飯を供へる時は、佛器の蓋の上へ線香の點したのを上せて、その燃えるので時間を計つて禪堂から本堂の前を通つて齋堂へ行く、其時、本堂の中央邊から

「典座師送香」

と唱へながら行くこと大衆は

「阿彌陀佛」

と應じて齋堂へ集つて來るのである。

斯様に、黄檗門では、凡ての行持に念佛が伴つて居るから、世間で黄檗は念佛禪ぢやといふけれども、其の念佛は普通にいふところの念佛とは大に意味が異つて居る。全體、黄檗で念佛を唱へるのは、教禪一致の立場から來て居る。通佛教の根本は、戒・定・慧の三學で、「經は定を證し、律は戒を證し、論は慧を證す」とあつて、經は定に

到る方法や、定に入つた様子を説き詮はしたもので、念佛宗の如き教宗は、即ち經に基づいて立てたのである。經は定を詮すといふから、經と定とは、元來、一如である。従つて、教禪も一如であつて、念佛の上に禪の消息がちやんと具つて居る。一聲の南無阿彌陀佛の中に、八萬四千の法門が悉く現はれて居る。南無阿彌陀佛の聲の起つた時が念佛の始まりで、聲の切れた時が念佛の終ちや等と考へるのは誤である。一聲の南無阿彌陀佛は、縦に時間を絶し、横に空間を絶して居る。天地の大も此聲に包括され、日月の明も之に覆蓋されて居る。臨濟は喝を以て佛法の適意を傳へ、徳山は棒を以て法性の面目を示して居るか、我が黄檗門に於ては、念佛を以て眞如の當相を説破するのである。故に、一千七百の公案も、五千餘卷の經文も、皆な此の「阿彌陀佛」の一聲の中に含まれて居る。夫の念佛宗に於て彌陀を念することによつて其の救濟の慈手に絶ることが出来る。説くとは全く其趣が異つて居る。

黄檗の念佛には、上述の如き意味がある。此の意味から黄檗の特色は念佛禪なりといへば、敢て當らねことはない。實に、臨濟の一喝禪、徳山の棒頭禪と共に、日本黄檗の念佛禪は温かき佛祖の命脈を傳へて居るといふことが出来る。

二、閑忙一如の生涯

今回、隠元禪師の二百五十回忌を宇治の黄檗山で營むに付いて、畏くも 至上陛下から、隠元禪師へ、眞空大師の號を賜つたので、其の慶讃會を向島の弘福寺で營んだことであるが、其の際、衲僧は香語に、禪師の記録の中にある「閑忙一如」といふ語を引用した。これは禪師が屢ば用ひられた語であつて、禪師は閑忙一如にあらざれば眞實に生死を透脱すること能はずといつて、自ら之を體現せられた。禪師は幼少の頃から種々辛酸を嘗め、老年に及んで、宗風擧揚の爲めに一刻も安閑として空費せられなかつた。實に多忙を極めた生涯であつたが、而も、所謂、忙中自から閑ありで、悠々として迫らざる趣は、全く閑忙一如の道理を會得し體現せられたものといふことが

出来る。

隠元禪師は、支那福州の清福で生れられたが、幼少の時、父が商用で遠國へ行たまゝ、行衛不明となつたので、二人の兄と共に母の膝下にあつて貧しい生活をして居られた。九歳の時に學に就いたが、資力が續かぬ爲め退いて兄と共に農業に従事して居られた。二十の時、母が永年貯へた金で結婚させ様としたが、禪師は辭して、父の行衛も分らぬのに結婚することは出来ませぬ。其の資金を下されば私は父を尋ねたいと思ふ」といつて、強いて母の許を受けて寧波の叔父を頼つて父の行衛を尋ねたが、三年を経ても一向に知れぬ。彼地此地と巡り歩く中に、南海の普陀山へ來た。普陀山は有名な觀音の靈地で、四方から參詣人が集る處であるから、或は父の頼を聞くこともあらふと思つて、其處の茶給仕となつて多くの人に接したが、何しても分らぬから、遂に佛陀大悲の力に依る外はないと考へて、二十九歳の時、黄檗山の鐵源禪師に就いて出家し、母をも獎めて信仰の門に入らしめられた。その後は、一心不亂に、辨道修

學をせられたが、或時、故郷に近い東林といふ處に居つた時、土地の人は其生立を知つて居るので、之を誹謗して、

「東林にも亦た佛ありや」

といつたが禪師は

「地に東林あるも佛性に東西なし」

といつて、毫も嚙牙に掛けなかつた。其頃、黄檗山の堂宇が破損したので、禪師は其勸化を集めて諸方を巡回され、飽饑嶺を越ゆる時、饑渴に苦しんで居ると、恰と山頂で三人の旅人が大きな西瓜を四つに切つて居たから、其の一片を貰つて漸く饑を凌ぎ「飽饑嶺に於て此食を得たのも何かの因縁であらう」

といつて、益々奮勵せられた。禪師は常に學を怠らず、苟も一長あるものに會へば、其の貴賤老少を問はず、就いて道を學ばれたので、學業大に進んで、或時、楞嚴經を聞ひて居る時、隣席の僧が、楞嚴經は極處にあらず。須らく禪を學ぶべし」とい

ふのを聞いて禪に志した。其頃、天童山から圓悟禪師が来たから、之に就て學び、又た其の法嗣徑山費隱禪師に就いて法を嗣がれた。圓悟、費隱、隱元の三人を、支那黄檗の三知識と並び稱する程であるから、其の學識禪機は、餘程、秀れて居つたものと見える。偈頌を作ること三十餘卷、藏經を閲すること兩三度といふに就いても、其の酷苦精勵の程が思ひやられる。日本に渡來せられてからも、九州の興福・崇福の兩寺に居る間にも、遠來の珍客でもあり、當時、我國の禪風が衰へて居つた爲め、求道の志氣盛なる臨濟曹洞の龍象が踵を次いで其門を訪づれたのに對して、一々、懇切に提撕して倦むことなく、又た龍溪禪師が攝津の普門寺に禪師を招聘してからも、四來の禪客を接化して寧日なく、又た其頃恰も明末清初の時代で、幕府は禪師を疑つて居つたので、種々面倒なことがあつた。けれども遂に江戸へ入府して將軍に謁して宇治黄檗山建立の裁下を得るに到るまでの慘澹たる苦心は、實に想像も及ばぬ程であつたに相違ない。黄檗山の建築の如きも莫大な金を以て一時にやつたのではない。化導の傍、歸

依者の寄附を得て、一部分づゝ建てるのであるから、殆んど一生涯の仕事であつた。かく教化と伽藍建立に日も亦た足らぬ程の忙しさにも拘らず、自己の修養には常に怠らず、且つ風流詔事を樂しまれたことは其の語録や遺墨の多いことによつても知られる。兎に角、禪師の一生は、非常に多忙であつた。東奔西走席温まるに違なしといふ有様であつたが、而かも、爲すところ毫も執着なく、悠悠自適、恰も白雲の徂徠するが如き趣があつて、禪師の謂ゆる閑忙一如を實際に體現せられたものである。これ、實に、禪師人格の特色である。

三、逸話と真空の出所

昔から、高僧の傳記には、不可思議な、所謂、神祕な逸話が付き物であるが、隱元禪師にも種々不思議な物語がある。高德な人になると、尋常の人の想像の出來ぬ靈妙な精神力の具はるもので、強ち之を荒誕無稽のこと、云つて排ける譯には行かぬ。

隠元禪師が支那の獅子巖に居られた頃、其の寺の入口に、丁度、船を立てたやうな大きな巖があつた。寺に来る人達が、往來の邪魔になるから、何とかして平になれば可いと言つて居つた。禪師は、それも時節が来れば平になる時もあるらうといつて居られたが、或夜、其巖の上に座つて大悲呪を讀誦して
 「此功德によつて平になれば我道必ず行はるであらう」
 と念せられた。翌朝、侍者が見ると、不思議にも其巖が平になつて居つたと傳へられて居る。

又、これは、日本へ來られてからのことであるが、禪師が黄檗山を木庵に譲つてから、或日、禪師が鉢植の白蓮華を見て居られると、忽然として開いた。禪師はこれ吉兆であるといはれたが、果して、其日、幕府から建築補助金二萬兩の寄進があつた。又、黄檗山建築の地を定められた時、一羽の鶴が其空を舞つて去らなかつたから、これ佛祖が殿堂建立の地を示し給ふものであるといつて、地を其處に定められたと傳へて居る。

衲僧等も、上堂は、必ず、晝間に行ふものごばかり思つて居たが、語録を見ると、夜間上堂の實例がある。それは、或時、隠元禪師が將に上堂の式に臨まんとされる時、孫弟子の月潭に、燈を點せと命せられ、又た式終つて室に歸つてから、今、唱へた香語を記録せねばならぬから燈を點せと命せられたことが記載してある。これによつて見ると、確かに、夜間上堂といふことが行はれたものと見える。

曹洞宗の惟慧道定禪師が隠元禪師に參せられたことは有名な話であるが、惟慧禪師は、餘程、嚴峻な人で、隠元の門に來ても、暇さへあれば常に打座三昧に入つて居られたと見えて、隠元禪師は、常に、座下の人達に、「あれを見よ、あの様でなくては大事了畢は覺束ないぞ」といつて策勵せられたといふことである。いづれ他門の宗風をも味はうといふ程であるから、並々の人ではなかつたに違ひない。

隠元禪師は、誠に、行持の綿密な方であつた。此點は酷だ曹洞の禪風に類似して居る。禪師、老境に及んでから、湯たんぼを用ひられたが、其湯を沸す薪代を一々知庫

へ渡されたといふことである、粗豪にして風狂に類するといふのとは、大いに趣が異つて居る。

此度、御宣下になつた真空といふ大師號の出所は、禪師の遺偈の中にある。即ち

西來柳栗起ニ雄風

幻出礫山不宰功 今日身心共放下

頓超ニ法界一真空

とある中の最後の二字を取つたのである。柳栗は拄杖のことである、隱元禪師は、西の方、支那から來つて、我國に雄風を振ひ起された。黃礫山を始め、諸山を興して、宗風を盛にしたが、其功たる素より佛天の加護によるもので、決して、自ら主宰の地位に居るべきではないと先づ謙遜し、今日、臨終に於て、漸く身心を放下し、法界を超越して真空に歸したといふのが、大體の意味である。真空は即ち妙有であつて、所謂斷見ではない。真空の二字は、最も能く隱元禪師の面目を顯して居る極めて適當な大師號である。

相撲禪話

一、無碍自在の大手品

禪は、元來、教外別傳不立文字と云ふが、畢竟、絶對の境を指して云ふのであつて一體、物と我と二面對待して居つては何事も眞の妙域に達することは出来ぬ。即ち、物事は、向ふに恃むと云ふことがあつては、まだ、眞の大道には遠うして遠しぢや。眞實、修業底の人とは云へぬのぢや。言ひ換へれば、無自性不可得の眞理に到らねばならぬ。無自性不可得ぢやから、無限であり、無窮である。無自性だから花は花と見え、月は月と見えるのぢや。そして、又、花を我とし、月を我とすることが出来る。否や。山河大地をも我にすることが出来るのぢや。さア斯る見地に到つたならば、我を無限大にも出来れば、又た無限小にもされる。

乃で、大には方所を絶し、細には無間に入ると云ふ藝當も出来るのぢや。こゝが、所謂、芥子の裡に須彌を入れ、須彌に芥子を容るゝてふ、無碍自在の大手品ができるのぢや。昔は、一人の行脚僧が、柏樹子となつて、鬼婆々の齒牙を免れたと云ふ話がある。又た彼の宅磨法眼が。常に、牛を畫くことを好んで、睡眠中に牛と變形したとある。此等は自己を忘れて、即ち、三昧に入つて、物我一體となつたからである。東京の一月は、相撲で賑ふやうであるが、此の物我一體と相撲に就いて面白い禪話を聴かさうかな。

二、陣幕關の大浪

これは禿の實驗談ぢやが、今より五十年も昔のこと、明治初年、老禿は、當時、黄檗山に職を奉じて居つた。或時、檗山の使僧として、伊豫國波止濱の圓藏寺に派遣されたのぢや。ところが、都合によりて、其處に船待ちして永く滞在することゝなつた

時、恰も、今治と云ふ所に、陣幕關一行の大相撲が興行された。陣幕と云へば、薩州島津侯のお抱へで、關西きつての大關であつたが、其の前頭に大浪と云ふがあつて、其の又た體格と云ひ力量と云ひ、中々勝れた大男であつたのぢや。乃で、是等の大相撲があるから、圓藏寺の住職此山和尚が、禿に、相撲見に行かれては、如何と勸られたので、これは滞在中の無聊を消すには可からうと、早速、見物に出掛けた。

其後、相撲は打上げとなつて、如何なる都合であつたか、右の相撲連が皆な波止濱に引き移つて冬越をする事になつた。乃で圓藏寺が相撲宿となつて、陣幕關の大浪前頭も皆な居つて、毎日、稽古相撲をやつて居る。或時、酒宴中に、大浪最負の者の云ふには此男(大浪)は、御覽の通り、體格も斯の通り偉大であるし、力も中々大したものであり乍ら、たい惜しい事には憶病と云ふか謙讓と云ふか、自分の目上のもの、即ち、師匠や兄弟子に對しては何うしても勝てぬ。で、本來なれば、小結は無論のこと、大關にもなれる力量はあり乍ら、今に此通り愚圖々々して居るは誠に殘念なこ

とで御座る」と、時に、圓藏寺此山和尚は、袈に向ひ問ふて云はるゝには、「ナント御使僧様には、禪機の妙用によつて、此男に勝せることは出来ませぬか」と、袈も、可哀想に思ひ、「それは容易すい事ぢや、袈がそれでは、一番、大浪に勝つ方法を傳授してやらう」と云ふて引き受けたのぢや。

三、可哀想に負け通し

此事を大浪に聞かすると、大浪カラ〜と笑ふて云ふには、「それや和尚さん折角だか兎ても駄目ぢやや、私共、多年の間、相撲の道に依つて苦しんで居てすら此通りなのに、如何に和尚様は物知りで居られるとも、大蛇の道は蛇ぢやから、相撲道は和尚様に解るものでは御座らん」と、乍併、此山和尚を初め、列席の檀信徒等で、大浪最負の人々が口を揃へて云ふには、「此人は本山からの御使僧様ぢやから、何んでも知つて居る偉なお方ぢや、一番、願つて勝つ法を授かつたらよからう」と勸める。そこ

で、大浪も、實は勝ちたいのぢやから、屹度勝てる方法があるならば是非願ひたい」と眞實誠心を面に現はして懇願して來たのぢや。

そこで、袈は、初めて、彼れの赤心から袈を信じ來たことを觀破し、そして徐ろに彼に説いた、「お前の名は何と云ふ」「ハイ大浪と申します」「成程、大浪とは善い名ぢや、併し名ばかりの大浪では駄目ぢや、眞の大浪となる工夫が専一ぢや」と云ふと彼は本氣になつて問ふて云ふには、「如何にせば眞の大浪となられますか」と、袈は、此處ぞ、一番、彼を強い觀念に入らしめる所であると認めて、直ちに彼に向つて、物我一體の法を觀念せしめんとして次の如く諭示したのぢや。

四、必勝の法を傳授す

「偕て、これからは袈は、お前に勝つ法を教えるで、袈の言ふ通りにせねばならぬ。それは、今晚一夜、當寺の本堂に參り、佛前の柱に寄りて坐禪せよ。イヤ強いて痛い

足を耐へて曲げなくてもよろしい。ごうでも好きに坐してやつたらよからう。最初は端坐して脊梁骨をチャンと立て、結跏するは難いで、唯だ其儘の坐で、大きな柱に靠れてやるのがよい。そして、観念するのぢや。其の観念は、お前の名は大浪である、だから、自分は、大浪ぢや、苟も眞の大浪ならば、島でも山でも洗ひ流す勢である、否な自分のみではない。最初は本堂の柱から、磬も、木魚も、燈籠も、佛像も、何もかも、皆な大浪になつて了ふ。終ひには世界の森羅万象悉く大浪となつて了ふと観念して、任運に自分が大浪だと云ふ心も忘れて了つて、盡天盡地都盧一面の大浪なれよ」と命じたのである。

前頭の大浪は、一心不亂に、佛前に到つて大きな柱に寄りかゝつて坐禪をし観念して居たが、翌日の相撲には、果した、全勝を博した。翌晩、彼が自白して云ふには、「御使僧の仰せの通り、本堂の柱にもたれて餘念なく坐禪觀法して居つたが、何う観念して見ても、木魚は矢張木魚で、到底、大浪にはなり切らない。更に、勇を鼓して、

専心一意観念したが、夜も深更に及び四隣寂として草木も眼るてふ時刻になつたら、たい氣が朦々とするのみで、自分は矢張り元の大浪だ。此に於て、迎も駄目知らんとすんでの事に退轉せんとする一刹那、不圖、傍に手を伸ばせしに錘錢一文手に觸れた。あ、何んだ人を馬鹿にしてと思つたが、又た思ひ返して否や此の一文の錘錢でもこれ日本國の寶の一小部分である。日本國中の金屬の一小部分から成つたもの、僅か錘一文でも千圓の耳が缺けるわい、吾も同じ同理で日本國に生れた男子の一人、豈に錘錢に劣つてたまるものか、層一層奮勵して、餘念に涉らず、大浪々と観念して居つたところが、夜も白々と明ける頃、大浪々と大聲で呼ぶ者がある、かと思ふと朝稽固が初まつた。何に外で大浪と呼んだのぢやない、太鼓の音であつたのだ。夫より、不思議にも、さながら夢の覺めたる如くに自分と自分が大きくなつた様な心地して、朝からの相撲には泥付かずで大勝利を得ました」

大浪は、事實談を隠さず袷に語つたのぢやが、實に相撲取は頭腦が單純ぢやから、

稍が必勝の法を教へると云ふと、直ちに一意専心三昧の境に入り、觸目眼前皆な是れ大浪ちやと觀念し、物我一枚の境に入つたから大勝利を博したのちや。

古人が、萬物を會して己れとなすものは其れ唯だ聖人乎、と云ふ語に逢著して豁然として省悟するところあり、そして聖人に己れなし、己れならざる所なしと、是れ、乃ち、心境一如、物我一體の端的を會得したのちや。されば、苟も、修養に志す者は此位の覺悟がなくては、一力士にも劣ると謂はねばならぬちや。

隨意無礙の三昧

一、身心自由の人

「戊午九月十五日黄檗傳心法要」誌公云、未逢出世明師、枉服大乘法藥以下を青山道場蔭涼會に提唱する蕙馱南

意彼所に到らんと、欲へば身も亦隨ひて、至るが故に意生身、とぞ名くなる隨意無礙、普く一切佛刹に、能く入り能く見て三昧の、如玄は自在神通を、得るが無量の通教の、登地菩薩と説く楞伽、楞伽なれども此はわづか、取意の意譯に過ぎぬのみ、腹は身の内其が我が身、身以て此の身を食ゆる身か、五つの指の一つでも、外様にされて折れざらめや、普く一切佛刹に、到らば到れ隨意無礙、ハバロフスクの占領は、一兵廻らず一彈も、發たで望とげしとぞ、其が市外なる黒龍江、

艦隊根據地包圍して、砲艦十七乗組も、共に捕獲し艦上に、みな日章旗建て列らね、立て禱すのみならず、武田中尉等操縦の、我が飛行機の三臺が、市民の頭上縦横の、飛翔に啞然たらしめしと、同地陥落殊勳者の、宮内聯隊長はじめ、大尉川名の名も高く、少佐前原腹廣し、何處の世界に又あらん。左にも右にもたぐひなや、如立三昧登地より、登地の脚下すべらしぞ、死んでも生きても大和魂、咲いても散つても櫻花。」

寶誌和尚は、「未だ出世の明師に逢はず、托けて大乘の法薬を服す」といふたが、本分の明師は、逢ふの逢はぬといふ相對邊のものぢやない。吾等の左右悉く、明師だらけぢや。大乘の法といふも、向上邊から見れば、何もその様に有難がるには及ばぬ。凡夫に迷妄の疾があるから、殊更に托けて服するまでのこと、大乘ぢやの小乗ぢやの、圓教ぢやの頓教ぢやのと、分別に涉れば已に相距ること白雲萬里、「一切時中行住坐臥、たゞ無心を學び、亦た分別無く依倚なし」ぢや。無心無分別の當處に、初め

て、本來の面目坊と相見了ぢや。此處に至れば、諸縁悉く生せず、即ち、此の身心是れ自由の人、一向生ぜざるにあらず、祇だ是れ意に随つて生ず、經に云はく菩薩意生身有りと云々の消息を會することが出来る。袈が偈に、意生身ぢや隨意無礙ぢやとあるは、傳心法要の中此の語を取つたのぢや。意生身ぢやから意の趣く處に随つて、佛刹にも到れば、魔界にも入る。到らんと欲して、到らざる處はない。謂ゆる隨意無礙ぢや。楞伽は難往入を譯するが、入り難いのは有心ぢやからのこと、無心無分別にして何んの處か入り難ぢや。

二、大和魂の發揮

意に随ふといへば、有心を認めるに似て居るが、其の意は爲作造作をとんと離れた謂ゆる「任運騰々として痴人の如く相似たり」の境界ぢや。縁に随ひ、感に趣いて、毫も執着なきが故に無礙自在ぢや。出征軍人が、國家の爲めに身命を抛つて、勇敢に

行動するものも、畢竟、隨意無礙の往來ぢや。ハバロフスクは手もなく落ち、聽ては、過激派も獨逸の兵も、戈を捨て、降參する外はないといふ、皇軍の向ふところ敵なく恰も無人の野を行くが如しぢや。これ如玄三昧の消息、無礙自由の往來で、眞忠は忠を忘るごある如く、忠義の二字にも管束せられぬ。眞忠の働ぢや。これこそ、實に、死んでも生きても潔よき大和魂の發輝、咲いても散つても見事なる櫻花の妙用ぢや。

三、隨意無礙の生涯

本分の那人は、傳心法要にある通り、「心頑石頭の如く都て縫罅無し、一切法汝が心に透り入らず、兀然として無著なり」ぢや。これを阿耨菩提を證したといひ、大事を了畢したといふけれども、阿耨菩提といふも、大事といふも、畢竟は閑名目、如來化人の説法は、猶ほ黄葉を金錢と爲して權に小兒の啼を止むるが如し」ぢや。あらゆる言詮意路を絶したる妙境界に達した人の行藏は通常人の意表に出で、名譽や利益の爲めに動せられず。泰然自若たるものぢや。袷が修行時代に隨身した文常和尚といふは、今の世には、一寸、類のない機峰の峻烈な人であつたが、實に其の境界は高潔なものであつた。九州宇佐の永福寺に居つて、極めて枯淡な生活をして居られた。近所に、大變、和尚に歸依した爺さんがあつたが、或時、此の爺さんの孫が過つて大釜の熱湯の中へ落ちたので、爺さん、早速、和尚に治療を頼んだ。和尚は俺は醫者ではないからといつて断られたが、強つてといふので詮方なく、大桶に水を汲ませて其の中へ小兒を入れて、「俺は知らぬぞ」と繰返しながら水を掻きまはすと、不思議にも大したこともなく、治つた。其の評判が擴まると、彼方からも此方からも病人や怪我人が治療を頼みに来る。和尚も人助けになることならばと云ふので依頼に應ずるが、決して禮物を受けぬ。學識もあり、禪機もあつて、當時の知識方からも老兄々々と崇められて居つたが、一生大地名藍へは出られなかつた。南天棒も文常和尚の痛棒を喫した仲間ぢや。随分、惡辣な接待をしたもので、橋の上から川の中へ叩き込む位は平氣ぢ

やつた。和尚の如きは眞に随意無礙の三昧に入つた人といふべきである。

瀧歇南は譯して集説頌といふ瀧は糸篇でなくて三すぬ、歇の大は太ではない。

徳山和尚の機鋒

徳山和尚は、西蜀の人である。初めは法相三論を學び、教相に明かで、殊に金剛經の講義が最も得意であつた。當時、支那の南方で禪宗が隆盛を極め、漫りに教外別傳不立文字を唱へ、卽心是佛を説いて世を惑亂すると聞き、此の邪教を打破せずんば佛教の前途が危いと、金剛經の疏抄を負ひ奮然として南方に向つて出發した。やがて澧州までやつて来て、とある路傍の茶店に憩ひ、婆さんが賣つて居る餅を買つて晝食をしようとした。すると、婆さんが曰ふには、

「載する所のものは是れ什麼ぞ」

お前さんの背に負ふて御座る荷物は其れは何んで御座るかと問ふた。徳山曰く、

「金剛經の疏抄」

此れは金剛經といふ有難い御經の講釋をしたものだ。婆さん曰く、

「我れに一問あり。備、若し答へ得ば、油糍を布施して點心を作さん、若し答へ得ずんば別處に買ひ去れ」

然らば、お前さんに問ひ度いことがある。若し答へが出来たならば此餅を全部お前さんに差し上げるが、答へが出来なかつたならば此餅は一つも賣ることが出来ない。他の店へ行つて御買ひなされ。斯う云つたのぢや。徳山曰く、

「但だ問へ」

承知をいたした、何なりと問ふがよい。婆さん曰く、

「金剛經に曰く、過去心も得べからず、現在心も得べからず、未來心も得べからず、と、上座、那箇の心をか點せんと欲するや」

金剛經に曰つてあるが、過去心も之を求むるに得ることが出来ぬ。現在心も之を求むるに得ることが出来ぬ。未來心も同じく其通りであると、全體、お前さんが晝食しようといふ心は何の心で御座るか、斯う問はれて徳山はハタと詰まつて、遂ひに答

へることが出来なかつた。そこで、婆さんに問ふて曰ふには、

「近處、甚麼の宗師かある」

此の近くに誰れか名師は居られぬか。茶店に此れほどの婆さんが居る。必ずや近くに大善知識が居られるに違ひないと見て取つたところは流石に徳山の常人で無いことが分る。婆さん曰く、

「五里外に龍潭和尚あり」

此處から五里ほど行つた處に龍潭和尚といふ大徳があると教へた。これを聞くと、徳山は、早速、龍潭の許を訪ねた。纔かに門を入るか入らぬに、大聲で言つて曰く、

「久しく龍潭と響く、到來するに及んで潭も見ず龍も亦た現はれず」

龍潭くんと、龍潭の名前は久しく世の中に鳴り響いて居るが、扱て来て見れば聞くほどに深い潭も無ければ、一向、水上に躍る龍の姿も見えぬわい。龍潭は何處に居るぞといつた意氣込みである。眼中、既に三世の諸佛も無い勢ひだ。時に龍潭は屏風の

後に居たが、ズイと出て来て曰ふには、

「子、親しく龍潭に至れり」

お前は親しく龍潭に至つて居るぢやないか。是れは本分事全提の有様ぢや。蓋天蓋地、是れ龍潭である。お前は一步も動かずして龍潭に至つて居るのである。若し此れ以外に龍潭を求めたならば、相去ること千萬里ぢや。徳山は乃ち禮拜して退き、これから龍潭和尚に師事したのである。

或夜、入室參問して夜深くなつた。龍潭曰く、

「夜、深けたり。子、何んぞ下り去らざる」

最う夜も深けた。お前も下つたがよいぢやないか。斯う云はれて、徳山は珍重(辭禮)して簾を掲げて外に出た。外には出たが眞暗だ。還り來つて曰く、

「門外暗し」

和尚、外は暗くて歩かれませぬ。かふ云ふと、龍潭は、紙燭に火を點じて與へた。

徳山が近よつて受け取らうとする一刹那に、龍潭はフツと吹き消して終つた。同時に徳山は忽然として省悟したのである。乃ち禮拜した。龍潭曰く、

「子、箇の什麼を見ても禮拜するや」

お前は何物を悟り得て其んなに有難がつて居るのか、徳山曰く、

「某甲、今より後、更に天下の老和尚の舌頭(言語)を疑はず」

昨日までは、即心是佛と聞いて、是れ邪道である、世を惑はすものであると怒つたが、今や疑滞頓に氷解し去つて、今後、決して、天下の老和尚の御言葉を疑ひませぬと言つた。明日、龍潭、上堂説法して曰く、

「此中、箇の漢あり。牙は劍樹の如く、口は血盆に似たり。一棒に打てども頭を回らさず。他時、孤峰頂上に向つて吾が道を立し去らん」

此の大衆の中に一箇の英靈漢が居る。牙は劍樹の如く口は血盆に似て、まことに勇

猛俊利の漢である。一棒に打てども頭を回らさずで、決して、生死を顧みるやうな奴ではない。他日、必ず、孤峰頂上に向つて、即ち、本地の家郷に獨立して、吾が道を建立することであらうと賞めた。すると、徳山は直ぐに起ち上つて、曾つては虎の子のやうに大切に居つた金剛經の疏抄を法堂の前に持ち出し、炬火を差し上げて曰ふには、

「諸の玄辨を窮むるも、一毫を大虚に置くが若し、世間の樞機を竭すとも、一滴を巨壑に投するに似たり。」

いろ／＼と玄妙な辯舌を極め、世間の樞機を竭くしたところで、一本の毛を大虚に置き、一滴の水を巨壑に垂らすやうなものである。文字や言句に拘つて理窟ばかりを捏ね廻したところで何んの役にも立つもので無い。直ちに自己心上に向つて眼を開かねばならぬ。斯う言つて遂ひに疏抄を焼いて終つた。

かくて徳山は龍潭の法を嗣いだのであるが、其の家風たるや峻峻極まるものであつて、「道へ得るも三十棒、道へ得ざるも三十棒、サア道へ、サア道へ」と、道つても道はなくとも三十棒を興へる。棒使ひの徳山として今に至るまで有名ぢや。曾て、瀉山が化を布くこと盛んなるを聞き、一つ瀉山の禪機を探らうと云ふので瀉山の處へやつて行つた。瀉山は弟子の仰山と共に瀉仰宗の開祖と仰がれる大徳で、これ又た禪門屈指の英傑である徳山が瀉山の許に到るや、包を解かずとある、旅支度の儘でドン／＼法堂に入つて、東から西へ、西から東へ、行つたり來たりだ。ギロリ／＼と左右を視廻はしながら、

「無々」

何んにも無い、何んにも無いと言つて、ツイと出てしまつた。まことに無禮極まる仕打ちである。彼れは斯く傍若無人の振舞をして先方が何う出るかと釣針を垂れた。即ち瀉山を試験したのである。最う此れで試験は濟んだとサツサと門まで出て行つたもの、也早々なるを得じで、待て／＼最う少し丁寧に勘検(試験)せねばならぬと言

つて、今度はチャンと禮儀を整へ、再び入つて瀉山に相見(面會)した。此時瀉山は座次せりとあつて大衆と共に各自の席について居たが、徳山は坐具(袈裟を着けた僧が身體を地(疊の上でも)につけて禮拜する時、又は坐る時に用ひる風呂敷のやうな敷物。用ひずして持つて居る時は左の手頸に懸けて居る)を提起(稍や上の方に引き上げる)して、

「和尙」

と呼んだ、座具を提起するのは禪僧の禮儀であつて、軍人や警官のする擧手の禮に當るものぢや。瀉山は此れに答禮せんと、靜かに傍にあつた拂子を取らうとしたが、徳山は其れを待たず、一喝を下し、袖を拂つて出で去つた。なか／＼の活作略ぢやわい。併し乍ら、瀉山が徳山を恐れたなごに見當遠ひをすまいぞ。圓悟が評して居る、「瀉山また忙ならず」と。落ち付き拂つたものだ、匆忙の様子は寸毫もない。丁度、南面して諸侯の入貢を受くるが如しぢや。扱て、其の晩、瀉山が首座に向つて問ふて曰く、

「適來の新到、什麼の處にか在る」

適來は「先き程やつて來た」といふほどの意、新到は新入門者ぢや。先き程やつて來た彼の新入門者は何處に居るかい。首座曰く、

「當時、法堂を背却し、草鞋を着けて出で去れり」

當時は「彼の時」である、彼の時、法堂にお尻を向けてサツサと出て行つて終ひました。瀉山曰く、

「此子、已後、孤峰頂上に草庵を盤結して、佛を呵し祖を罵り去ることあらん」

此子とは「此の男」とか「彼の男」とかいふ意ぢや。子は男子の意味である。彼の男は、已後、必ずや孤峰頂上に草庵を盤結して(本分の境、大智慧門の境界に住して)佛を呵し祖を罵り去る(獨立不羈の境界)であらうと賞めた。雪竇着語(批評)して曰く、雪上に霜を加ふと。白いもの、上に白いものを加へたと同じて、瀉山の賞讃は餘計なお世話だと言ふのぢや。誰れだつて孤峰頂上に草庵を盤結して獨立不羈の

境界でない者は無い。佛祖も、悟りも、迷ひも、何處に其んな者がある。そんなことを言ふのは已に第二第三に墮在して居るといふのぢや。が、雪竇の着語も、之れまた何じく頭上に頭を置くものである。總てが言句の上には無い。皆さん、眞意が分りましたかい。

坐禪は作佛に非ず

江西の馬祖山で、禪海の龍象を接得して居つた彼の有名な馬祖道一禪師は、「信心銘」の著者鑑智僧璨から六代目の祖師で、其の徳風は一世を風靡したのみで無く後世の仰ぎ慕ふところである。

此の馬祖道一禪師が未だ修業中のことである、衡嶽山といふ山に在つて、坐禪をして居つた。時に、南嶽懷讓禪師が、其の得難き法器なるを知つて、往いて問ふて曰はれるには、

「大徳、坐禪して其麼をか圖る」

お前さんは、其の様に毎日〱坐禪にばかり骨折つて何を爲さらうとするのだね。

斯う云つて問はれたのぢや。馬祖曰く、

「作佛を圖る」

坐禪は作佛に非ず

佛と作らうとするので御座る。これを聞かれた南嶽懷讓禪師は、一箇の甄を拾つて来て、馬祖が坐禪して居る前の石の上で、一生懸命に磨られた。馬祖は其れを見て不思議に思ひ

「甚麼をか作す」

何をなさるので御座る。師、答へて曰く

「磨して鏡と作す」

此れを磨つて鏡としようとするのぢや。馬祖曰く、

「磨甄、豈に、鏡となすを得んや」

甄を幾ら磨つたところで、鏡とすることが出来るものですか。師曰く、

「磨甄、既に、鏡となすんば、坐禪して豈に作佛を得んや」

甄を磨つて鏡となすことか出来ないならば、幾ら坐禪をしたところで佛となること

が出来ものか、馬祖曰く、

「如何にしてか即ち是ならん」

然らば如何にしたら可からう。師曰く、

「牛を車に駕するが如き、車もし行かすんば、車を打つが即ち是が、牛を打つが即ち是か。」

牛に車を引かせるに、車が轉回らぬからと云つて車を打つのが可からうか、牛を打

つのが可からうか。斯う問はれて馬祖は答へることが出来なかつた。師、更に語をつ

いで曰はれるには、

「汝、坐禪を學ぶ、坐佛を學ぶと爲さんや。若し、坐禪を學ば、禪は坐臥に非ず。

若し、坐佛を學ば、佛は定相にあらず。無住の法に於て取捨すべからず。汝、若し、

坐佛せば即ち是れ刹佛。若し、坐相を執せば、其理に達するにあらず。」

坐禪が直に禪であると思つたならば大きな誤りで、これによつて、大悟を期待する

のは迷ひの大なるものである。禪は坐臥にあらず佛は定相にあらずや。迷悟二つな

坐禪は作佛に非ず

がら忘却し、坐臥ともに遠離して、其處に始めて、凡聖、生死、涅槃が一場の夢となる。此の一示誨を聞いてから、馬祖は南嶽懷讓禪師について遂ひに斯くの如き大人物となつた。

芳草に随ひ落花を逐うて

長沙(支那湖南省)の鹿苑寺に居た景岑和尚が、一日、遊山して、歸つて門口まで來ると、首座(門弟中第一位者)の一僧が、

「和尚、什麼の處にか去來せし。」

和尚さま、何處へ御散歩になりました。斯う云つて訊ねた。すると、和尚は、

「遊山し來る」

山遊びに行つて來たわい。と答へた。首座曰く、

「什麼の處にか到り來る」

遊山のことは分りましたが、何の邊へ御出でになりました。山の上か、下か、前か後か、何方で御座るぞ。かう云つて、和尚の脚下を試したのちや。すべて、禪僧の問答は、言葉の表面だけでは普通の話のやうである。が、必ず深き底意を有つて居る。

芳草に随ひ落花を逐うて

さア此時の和尚の答へがナカ／＼面白い。

「始めは芳草に随つて去り、又た落花を逐うて回る」

最初は春の野花に誘はれて行き、又た落花に引かれて歸つた丈けである。其處に何んの意があり、目的がある譯では無い。去來蹤跡なし、身心自から輕快なりぢや。首座曰く、

「大いに春意に似たり」

大層、面白い陽氣な遊山でありましたねとは表面の言葉、芳草といひ落花といふ、

尚ほ春景の一方に偏す。沒蹤跡の往來とは云へまいとの底意ぢや。和尚曰く、

「也た秋露の芙蓉に滴るに勝れり」

冷い露が枯れた蓮の葉に滴るといふ秋景色——秋景の澄み渡つた悟境——殺風景な悟り臭い悟境——よりは春風駘蕩たる景色は眞實く陽氣で好いわい。何處から何う推されてもサラ／＼と答へて行くところ、神機縦横、洒々落落たるものぢや。

狗子に佛性ありや

趙州從諗禪師といへば、禪宗史上には異彩を放つて居る大人物で、發心修行の途についたのが六十歳の時で、それより二十年間、即ち、八十歳になるまで修行をなし、百二十歳まで生きて居つた人である。或時、一僧があつて、趙州和尚に問うて曰ふには、

「狗子に佛性ありや也たなきや」

狗の子にも佛性が御座りますか何うですかといふ問ひである。和尚曰く、

「無」

釋迦加來が、十二月八日の曉天に閃たる明星の光を仰いで、豁然大悟さるゝや、「有情非情同時成道、草木國土悉皆成佛」と絶叫せられた。また「華嚴經」にも「奇なるかな一切衆生、佛の智慧徳相を具す」とある。此僧は此れを擔いで居る。葉にも木にも

佛性があるといふからには、彼の狗の子にも有りますかいと問ふたので、趙州は之れに答へて唯だ一言「無」といはれた。サア此の「無」がナカ〜六ヶ敷い。有無の「無」でもなければ、虚無の「無」でもない。ところがこの僧は、有無の「無」と解して「佛性が無い」と答へられたと早合點した。そこで理窟を言つた。

「一切衆生には皆な佛性ありと曰ふでは御座いませぬか。」

これでは問題にならぬが、流石は趙州ぢや、

「伊れに業識性あるが爲めなり」

と答へられた。又た、或時、他の僧が和尚の許へやつて来て、前と同じく「狗子に佛性ありや也た無きや」と問ふた。今度は、和尚「有」と答へられた。固より有無の「有」ではないが、此僧にも此の「有」の意味が解らなかつたから、亦た理窟を言つた。

「すでに佛性ありと曰ふ、何故に、狗の腹などに飛び込んだのですか。」

趙州曰く

「他の知つて故に犯すが爲めなり」

言葉に囚れて居つては趙州の腹は分らぬ。唯だ一箇の「無」字、古來、幾多の華傑が玉の汗を流して參究したものである。此中には、佛の一代藏經もあれば、千七百則の公案も含まれて居る。否な管に其れのみで無い、天地間のものは一として備はらぬものが無い。無門和尚も、「唯だ者の一箇の無字乃ち宗門の一關なり」と云つて居るぢや。

喫粥し了れりや

一僧が趙州和尚のところへ来て、

「某甲、乍入叢林、乞ふ、師、指示せよ」

乍入叢林とは始めて叢林に入つたといふことである。叢林とは禪門修行の道場をいふのちや。私も始めて此の禪堂に掛錫いたしましたして御座います。何うか今日より宜しく御指導を御願ひいたしますといつた。すると、趙州は、

「喫粥し了れりや未だしや」

お前さん、御飯を食べたか未だか。

僧曰く、

「喫粥し了れり」

唯、食へまして御座います。趙州曰く、

「鉢盂を洗ひ去れ」

左うか、食へたか。それならば食器を洗つて置けよ。斯う云つた限りぢや。趙州和尚の非凡な人であつたことは前にも述べて置いたが、古人は「口唇皮上に光を放つ」といつて賞めた如く、實に全身悉く口であるとも云ふ可きほどで、無雑作に出して行く其の一言一句が、寸鐵人を刺すの概があるのみでなく、少しも主角が無く、悟り臭いやうな所は寸毫もない。悟り臭い悟りは決して本物の悟りでは無い。「御飯が済んだか」と、問ひ、「食器を洗つて置け」といふ、唯だ其れ丈けであるが、趙州和尚の五臟六腑が光を放つて現はれて居る。併し、此語を早合點すると無門和尚の言つた如く、鐘と甕とを取り違ひるやうなことになるぞ。

未だ唇を沾さず

曹山和尚は、洞山和尚と共に曹洞宗の一派を開かれた大徳で、洞山和尚の弟子である。此の曹山和尚の許へ、或る坊さんが来て曰ふには、

「清税、孤貧なり。乞ふ、師、賑濟し給へ。」

清税は此の坊さんの名前である。私は孤獨で貧乏で御座います。何うか救済して載き度い。斯う云つて出かけた。此れは表面の意味で、前にも述べた通り、禪宗の問答には必ず底意がある。其實、此僧、なか／＼食へない。迷ひは愚か悟つた何物も御座らぬ、洒々落落の境界にあるものだよといふ意味が見える。これに對して曹山は、

「税闍梨よ」

と呼びかけた。闍梨とは坊さんに對する尊稱である。税、應諾す。

「ハイ」

と答たへ。曹山曰く、

「青原白家の酒、三盞喫し了つて、猶ほ道ふ、未だ唇を沾さず」

青原は地名と見て置いた人もある。普通一般の百姓を白家といふと解釋して居る人もある。また白氏の家と見て置いても可いと云つた人もある。そんな事は何うでも可い。我國で云へば、昔なら劍菱、今なら白鷹とか菊正宗、そのやうな美味しい酒を十分に喫し了つて、一向に未だ飲みませぬと云つて口を拭つて知らぬ顔で居る奴ちやと云ふ意味ぢや。

清税といふ坊さん、私は孤貧で御座ると云つて、ズツと下手に出た。が、此の下手に出る奴はなか／＼油斷がならぬ。ウツカリして居ると曹山を土俵の外へ投げ出さうと構へて居る奴ちや。然れども、曹山、具眼、チャーンと先方の手を見抜いてしまつて居る。ところで、諸人、且く道へ、那裏か是れ税闍梨酒を喫する處。サア道へ、道つて見よ。

智門の蓮華荷葉

智門和尚は、智門光祚相尙のことで、青原行思から第九世の祖師である。雲門宗の開祖、雲門文偃の嫡孫であつて、香林（もと寺の名、後、通名となる）の澄遠和尚の法嗣である。彼の「碧巖録」の前身たる「雪竇頌古」を書いた雪竇重顯和尚の師匠に當る人ぢや。本名は光祚であるが、隨州の智門寺に居たので智門が遂ひに通名となつた。或時、坊さんがあつて、此の智門和尚に向つて、

「蓮華未だ水を出でざる時如何」
 蓮華がまだ水の中から出で、蓮華の形状とならぬ時は如何で御座るか云つて問ひを發した。すると、和尚曰く、

「蓮華」

何う云つて答へるであらうかと眼を睨つて居ると、「蓮華」と造作なく答へてしまつ

た。そこで、坊さんは、再び、

「水を出で、後如何」

それでは水の中から出て立派に蓮華の形状をなした時は如何で御座るか云つて問ひ詰めた。和尚曰く、

「荷葉」

今度は「荷葉」と答へた。さア水を出でざる時が蓮華で、水を出で、後が荷葉だ。全體、蓮華と荷葉とは別々の物であらうか、蓮華とか荷葉とかいふ言葉に捉はれてはならぬ。此の問ひの底意は本體と現象との二方面に向つて發したので、「月未だ東山に上らざる時如何、月既に東山に上りて後如何」でもよい。「釋迦未だ出世せざる已前如何釋迦既に出世して後如何」でもよい。已前だ、已後だ、本體だ、現象だと穴にはまつて愚圖ついて居ては自由の分は得られぬ。智門和尚の答へは、本體即現象の上に立つて答へて居る。

洞山の寒暑廻避

一僧あり、洞山和尚に向つて問ふて曰く、

「寒暑到来せば如何か廻避せん」

寒暑が到来した場合に、何うして之れを廻避たものでせう。斯う云つて問ふた。此の洞山和尚といふのは、曹山和尚と共に曹洞宗の開祖であつて、名を良价といひ、悟本大師のことである。彼の「五位の頌」や「寶鏡三昧」は此の洞山和尚の作ぢや。寒暑到来とは、暫く此句を用ひたまで、苦樂到来と云つても、生死到来と云つても可い。和尚、答へて曰く、

「何んぞ無寒暑の處に向つて去らざる」

暑い寒いが厭ならば、暑い寒いのない場所へ行くが可い。生死や苦樂が恐いならば、不生不滅の佛境界に到れ、其處は本來無寒暑である。生も無ければ死も無い。苦も無

ければ樂も無い。僧曰く、

「如何なるか是れ無寒暑の處」

然らば何んな處が無寒暑の處で御座るか。和尚曰く、

「寒時は闇黎を寒殺し、熱時は闇黎を熱殺す」

闇黎（又「ザリ」）は梵語「阿闇黎耶」の略、軌範の義で、僧の師となる可き者をいふ。僧の尊稱である。無寒暑の處とは外でも無い、貴僧、寒に遇はれたならば渾身寒になりきり、熱に遇はれたならば渾身熱になりきる。唯だ其れ丈けだ。其處に、暑いとか、寒いとか、生くるとか死ぬるとか、苦とか樂とかを絶した安樂の境界がある。洞山の此の答意は、二見對立を返けたもので、寒なら寒、暑なら暑と同居同死して、始めて、無寒暑の處に到り得たものだといふのぢや。口先では生死即涅槃、煩惱即菩提など、勝手に放言はしても、實際、其の境界に到るといふことは容易のことぢや無い。

洞山の麻三斤

或る坊さんが、洞山和尚（雲門の法嗣、洞山守初禪師なり、洞山良价禪師にあらず）に向つて問ふて曰く、

「如何なるか是れ佛」

佛とは如何なもので御座るかと云つて問ふた。和尚は、此時、丁度、胡麻を量つて居られたが、答へて曰く、

「麻三斤」

麻は胡麻のことである。胡麻三斤と答へられた。（麻三斤は古來、「マサギン」と訓ませて居る。「マサンギン」と訓まぬ）胡麻三斤とは面白い。答處まさに千斤の力量ありぢや。然りと雖も、凡情攀づ可からず。言葉に拘つて居れば分ること無。麻三斤は、茶碗五個でも、筆十本でも可い。眞意は麻三斤といふ言葉の外にある。到底、言

説の及ぶところで無い。人々、冷暖自知せねばならぬ。

扱て、「如何なるか是れ佛」、これは頗る肝要な問題である。我れ、佛教徒が汗水流して研究する所以のものは、悉く此の問題の解決が目的である。古人が此の問題に對して答へられた實例を、今ま二つ三つ舉げて見ると、

「殿裏底」

佛殿にある佛がそれだと答へた者もある。

或は曰く、

「三十二相」

三十二相八十種好の相貌を具備したものが佛だと答へた者もある。或は又た、

「眼横鼻直」

眼が横に鼻が直について居るものが佛であると答へた者もある。或は又た

「乾屎橛」

洞山の麻三斤

乾屎橛とは「屎ふきべら」ぢや。屎ふきべらが佛であるご答へた者もある。是等は皆な、言句を離れた處に意味があるので、決して、言葉尻について廻つて、飛んでも無い誤解をしてはならぬ。

劉鐵磨の臺山

百丈懷海禪師の法嗣に瀉山靈祐禪師といふのがある。司馬頭陀に見込まれて潭州の瀉山を開き其處に寺を建て、大衆を接得された。禪僧中でも殊に傑物である。こゝに瀉山を距る十里（支那の一里は日本の六町）の處に、俗姓劉氏の娘で、鐵磨と綽名をされて居つた尼さんが住んで居た。夙に靈祐禪師に參禪して見性悟道し、機鋒頗る峻烈なるものがあつた。或る時、此の劉鐵磨が瀉山和尚を訪れた。瀉山は尼さんが入つて來るのを見るや否や。

「老特牛、汝、來れりや」

瀉山は、常々、自ら、「我れ死後は檀越家の水牯牛（水車場の牝牛）を生まれ易つて來る」と言つて居た程で、此時も例の口癖が出たと見えて、「やア老ぼれの牝牛殿よ御座つたか」とやつた。特牛は牝牛である。天桂禪師は、此の語に異類中行の響があ

ると言つて御座るぢや。異類とは人間以外の生物、其の人間以外の生物の中に交つて之れが濟度に任ずることが中行である。瀉山は天上界にも生まれず。人間界にも生まれず、一個の水牯牛と生まれ來つて異類中行をなさん。汝、鐵磨も亦た此の慈悲行をなし得るに足るものであると許して、こゝに老特牛と呼んだのぢや。圓悟は此語に「探竿影草」と着語（批評）をして居る。老特牛など、オダテ、置いてチャーンと探り棒を入れて居るといふのぢや。ところが、鐵磨は、

「來日、臺山に大會齋（大供養）あり。和尚、還た去る（行く）や」

近い内に五臺山で大法會があるさうな。和尚さんも行かれますかえ。斯う云つて奇想天外な問ひを發した。臺山は五臺山で、山西省の代州太原府五臺縣にある。我國の高野山といつたやうな處で、山上に五つの峰があつて、其處に一百有餘の寺が散在して居る。支那佛教史上に於て有名な處ぢや。瀉山は湖南省の潭州長沙府にあつて、其の間相距ること、數千里（支那の里程で）ぢやさうな。然るに、明日か明後日か知

らぬが、近いうちに其處で大法會があるが出發して行くのかと云ふのぢや。隨分、突飛な問ひである。大會齋とは大供養で、上は佛菩薩から下は人天鬼畜に到るまで残らず供養する大法會である。圓悟は「箭、虚しく發せず」と着語して居る。劉鐵磨の發つた矢には虚が無い。瀉山の胸を發矢と射止めたと云ふのぢや。また、「大唐鼓を打てば新羅舞ふ」とも着語して居る。瀉山と鐵磨との應對は、大唐と新羅と距離は遠いが調子が能へ合つて、實に知音同士の出會であると云ふのぢや。さア瀉山は何う答へるであらう。「瀉山身を放つて臥す」とある。「放は」從來「はなつ」と訓じては居るが、「ほしいまゝ」と訓ずるのが當つて居るので、勝手氣儘に大の字なりと云つたところぢや。鐵磨の問ひも奇抜なれば、瀉山の答へも奇抜ぢや。此邊の消息は人々、冷暖自知するより外に仕方がない。「磨便ち去る」で、これを見た鐵磨は挨拶もせずサツサと出て行つた。まことに任運無作の活機輪ぢや、

百丈の獨坐大雄峯

百丈懷海禪師は、馬祖道一禪師の法嗣である。洪州南昌府の百丈山に居られたので、百丈が遂ひに通名となつたのぢや。百丈山は本名を大雄峰といふ。高さが百丈あるからと云ふので、別に又た百丈山の名を得たのである。百丈山中の一峰が大雄峰である。と解釋した本もあるが、其れは間違つて居る。此の百丈懷海禪師は、後に大智禪師と諡せられたが、實に、博識高德の大宗匠で、馬祖道一禪師の門下には八十餘人の善知識を出されたが、眞に大機大用を得たものは、此の百丈一人である。とまで言はれて居る程ぢや。殊に「百丈清規」を制定して、後世、叢林の規矩を確立されたことは我が禪門の爲めに大功勳あるもので、彼の晩年に及んでも常に力作して一日を空しくせず。「一日作さざれば一日食はず」と言はれた逸話と共に、長く後世に傳はるものである。或る時、一僧があつて、百丈和尚に問ひを發した。

「如何なるか是れ奇特の事」

奇特とは、珍奇、特殊など、熟字して、異つた珍らしきことぢや。「和尚、近頃、何か異つた話は御座らぬか」といふ意味に解して居る人も澤山あつて、固より、それでも可いが、今は「佛法の中の奇特の事とは何んで御座るか」といふ意味と見て置くことにする。或る提唱本に「何が一番難有いことで御座いませう。佛法中一番玄妙なところは何んであらう」といふやうに書いたのがあるが、此れは些と變な説き方だ。それでは「如何なるか是れ聖諦第一義（佛教の根本的原理）」と同意になつて終ふ。今、此の僧は、聖諦とも俗諦とも、第一義とも、第二義とも言つて居ないところが、勝れた力量の見えるところで、圓悟は、「言中に響きあり」とか「句裏に機を呈す」とか、「人を驚殺す」とかと着語（批評）して居る。舌端に針を含み、句裏に鋒を藏し、如何にも勇ましく、容易ならぬ代物の問ひ振りだ。圓悟、また、着語して曰く、「眼あれども曾つて見ず」。奇特の事とは、其れ、お前の眼前に見えて居るぢやないか、其れが

見えぬとは、扱て〜お前の眼は何んの爲めに有つて居るのかと冷かした。が、此の僧、見て見ぬ振りをして居るのかも分らぬ。百丈曰く、

「獨坐大雄峰」

百丈は大雄峰の主人ぢやから、大雄峰に獨坐して居ると答へた、柳は縁に獨坐し、花は紅に獨坐し、鳥はカアノ〜に獨坐し、雀はチウ〜に獨坐して居る。何んど奇特の事では無いか。圓悟の着語に「凛々たる威風四百州」とある。大雄峰に獨坐して居る百丈の境界は、大千世界に獨坐して居る。支那四百州は愚か、天地四方、其の威風に靡いて居る。また「坐者、立者、三つ俱に敗缺」とも着語して居る。坐者とは坐つて答へる百丈で、立者とは立つて問ふところの僧である。問ふものも答へるものも、最早問答言語に涉つては二つながら俱に大失敗（敗缺）である。「奇特の事」も「獨坐大雄峰」も言葉なんかで論議の出来るものぢやない。百丈が斯う答へると同時に、「僧禮拜す」とある。直に恭しく禮拜をした。すると、「丈、便ち打つ」で、百丈は、突如

一棒を食はせた。圓悟は、「僧、禮拜す」の下に「伶俐の衲僧」と着語して居る。禪家の禮拜は、必ずしも、敬意を拂つた時とか、感謝の意を表する時丈けにするのでは無い。冷し半分にやる時もある。「は、ア和尚は獨坐の向上邊に停滯して御座るのぢやなハツ〜ハ。いや何うも有難う」と拜つたところ、此僧、なか〜の古強者ぢや。百丈和尚を尻の下へ敷いてしまつて居る。此儘、逃してはならぬ。果然、百丈はした、いかに一棒を與へた。さア此の棒にも賞棒と罰棒とがある。雪竇は百丈が手腕の妙を賞めて「電光石火、機變を存す」と云つて居る。まことに接化自在なものぢや。

雪峯の鼈鼻蛇

雪峰義存禪師は徳山宜鑿禪師の法嗣で、雲門宗の開祖、雲門文偃禪師の師匠である。雪峰山に住し居つたので雪峰が通名となつた。雪峰、或時、衆に示して曰く、

「南山に一條の鼈鼻蛇あり、汝等諸人、切に須らく好く看るべし」

當時、雪峰山の南に、鼈鼻蛇、即ち、鼻が鼈に似たる蛇が現はれて毒氣を吐き人を害するとの評判が高かつた。雪峰は直ちに此の毒蛇を活用して宗風を擧揚されたのである。南山に一匹の鼈鼻蛇が居る。お前等はよく看るが可い。さア看たか何うだ。此の毒蛇とは、眞如とか、法性とか、本來の面目とか云はるゝものを指さしたので、三千世界を一呑みにするかと思へば隙間の無い場所へでも潜り込むと云ふ大變な奴である。千古萬古、一味平等の體を以て、千差萬別の現象界となつて、姿を現する。花となつては紅に、柳となつては綠に、山となつては聳ち、河となつては流れる。時に、長

慶（雪峰の弟子、長慶慧稜禪師）が聲に應じて曰く、

「今日堂中大いに人あつて喪身失命す」

和尚は南山と云はれるが、何に、現今、此の堂中に其の毒蛇に噛まれて喪身失命（命を失くする）した者がある。暗に、絶後に蘇生した此の長慶が居るぞ、滅多なこととは言ふまいぞこの見識ぢや。其後、一僧が、此の問答を玄沙（同じく雪峰の弟子、玄沙師備禪師）の處へ行つて物語つた。すると、玄沙は曰く、

「須らく是れ稜兄（長慶慧稜禪師）にして始めて得べし。然も此くの如くなりと雖も我れは即ち不恁麼（斯くの如くならず）」

流石は慧稜法兄である。慧稜法兄でなくては左うは言へまい。かう言つて一面に長慶を肯つたが、併し乍ら、我れは即ち不恁麼で、一面に於ては肯はぬ。我れには我れの言ひ方があると云ふのぢや。そこで、僧曰く、

「和尚、作麼生（如何）」

それでは和尚の御答へは何うで御座いますと突つ込んだ。玄沙曰く、

「南山を用ゐて什麼かせん」

南山と言はれるが、南山を用ゐて其れが何んになるか。蓋天盖地、鼈鼻蛇の毒氣で充滿されて居る。法性の至らぬ隅は無いぞこの意ぢや。ところで同じく弟子の雲門（雲門文偃禪師）は、雪峰の面前へ、持つて居つた拄杖（禪僧の持つて居る七尺の棒）を投げ出して、

「それ毒蛇が出て來たぞ」

と云つて怕れる真似をした。宇宙の本性は、諸人の面前に、露堂々、少しも隠れるところ無く活現して居るぞこの意味ぢや、要するに此の則は、雪峰が其の法嗣の、長慶、玄沙、雲門の三人と共に、同道唱和して一條の蛇の使ひ分けをしたものである。四家 各々、家風を存し、而も、其の間に、揆を一にして居るものがある。

黄檗の唾酒糟漢

黄檗希運禪師は百丈懷海禪師の法嗣で、臨濟宗の開祖、臨濟義玄禪師の師匠に當る人ぢや。福州の福清縣にある黄檗山で出家した人であるから黄檗が遂に通名となつた。後、唐の宣宗皇帝の宰相裴休が、黄檗の爲めに、洪州に一大禪院を建てたが、黄檗は故郷の空が忘じ難く、これをも黄檗山と呼んだといふことである。此の黄檗希運禪師が、一日、大衆に對し示誨して言はれるには、

「汝等諸人、盡く唾酒糟の漢なり。恁麼（斯くの如く）に行脚（諸方を遍歴して修行する）せば、いづれの處にか今日（成道の今日、大悟の日）あらん。還た大唐國裏に禪師（禪道の師匠）なきを知れりや。」

汝等は、何れも此れも皆な唾酒糟の漢である。唾酒糟とは酒の糟を食ふといふので、眞實の酒を飲まずに糟を食ひ歩いて居る奴ぢやといふのぢや。元來、悟りだとか迷ひ

だとかいふものはあつたものではないが、徒らに悟りだの迷ひだのといふ言句に纏縮して居つて、眞の法味を知らぬ奴である。其んなことでは、何時まで行脚し廻つても遂ひに大事了畢の期は無いぞ。汝等は此の大唐國中に禪道の師匠なんかといふものは一人も無いといふことを知らんのかや。汝等のやうに客觀的にばかり求めて廻つては駄目ぢや。一つ主觀的に求めて見よ。斯う言つて示衆された。すると、大衆の中から、一人の坊さんが出て来て云ふには、

「只だ諸方に徒（徒弟）を匡し、衆（大衆）を領するが如きは又た作麼生（如何）」

左うは言はれますが、現に、諸方で、禪堂を設け大衆を集めて、鉗鎚教化して居れるのは、彼れや、全體、何うしたもので御座いますか。黄檗曰く、

「禪なしと道はず、只だ是れ師なし」

否や、禪が無いとは道はぬ。禪は盡十方に充滿して居る。唯だ禪なるものは、答授せらる可きもので無いと云つたのみぢや。此の間端鉤頭には餌がある。人をして直下に本地の風光に接せしめんとする大慈悲心の存するところを見ねばならぬ。

高津柏樹老師評唱

主心お婆々粉引歌

主心お婆々粉引歌

白 隱 和 尙 作

有がたいぞや天地の御恩、あつささむさの程までも、夜と晝ともなうてはならぬ、
ひるは働く夜ら休む、雨露の御恩で五穀もみのる、するの野山の草木まで、君の御恩
は山より高い、賤がわらやのはてまでも、繁昌めされよ萬代までも、風に草木のなび
く様に、わすれまいぞや御主の御恩、遠きあの世の後までも、親の御恩は海より深い
恩をしらぬは、犬猫ぢや、孝行するほど子孫も繁昌、親はうき世の福田ぢや、心短機
な殿子の癖に、主の専途にや遁げはしる、忠と云ふ字を能く見れば、外へちらさ
ぬ此心、五尺餘のからだは持てど、主心なければ小童ぢや、武藝武術も第二のさたよ、
とかく主心がおもぢやもの、主心なければ明屋も同じ、狐狸も入りかはる、周の文武

の太公望が、云ふておかれた名言がござる、武家の大事の三略の書に、驚悲亂りに起るはごうぢや、武士に主心の定まらぬゆゑ、主心定まる修行ぢや、弓は鎮西八郎殿よ、鎗は眞田よ、太刀打や九郎、縦ひ此等を欺く人も、主のこゝ際の専途の時に、主心なければ腰ぬける、主心至善二つはないぞ、常に正しき此心、唐の大和の物知りよりよ、主心定まる人がよい、武士を絹布で食はせておくと、主の専途のひと小ぐち、多藝多能も先づさしおいて、主心定まる場所を知れ、主心至善定まる時は、持齋持戒も外にやない、有難いぞや主心の徳は、太刀や劔の刃もたぬ。弓も鐵砲も届かぬからに、敵と云ふ字は更にない、土も草木も皆な主心、神とまります高まが原も、五慾二毒ないところ、民を新にするとは云へど、至善定まる迄のこと、出家も沙門も高位も智者も、主心なければ皆な民ぢや、宮はわらやよわらやは宮よ、主心一つが潮ざかひ、上下萬民主心があらば、治めざれども世は萬歳、嬉し目出度や主心の徳で、うたぬ隻手の聲も聞く、悟り迷ひを口には説けど、主心居らにや何ぢややら、袈裟の衣で見かけは

よいが、主心すわらにやひよんなもの、四國西國めぐるもよいが、主心なければむだ道よ、主心丹田氣海にみつれや、仙家長者の丹薬よ、丹を鍊るには鍋釜いらぬ、元氣丹田にすわるまで、不死の丹薬望みな人は、つねに氣海に氣をつけよ、虚空界より長壽のものは、氣海丹田に住む主心、氣海丹田に主心が住めば、四百四病も皆な消ゆる主心お婆々はいくつになりやる、わしは虚空とおないぞし、虚空おやちは死にやると儘よ、わたしやいつまで此通り、山河大地を我子にもてば、わしに不足な事はない、武士の身の上は覺悟がおもぢや、生きて一たび死ぬがよい、生きて死ぬるはたやすい事よ、主心お婆々に出逢ふてとへ、主の御恩で仕立てたからだ、喧嘩なごする不覺者、武士は臆病と忠義の一つ、一度主君に上げおくからだ、我身ながらも自由にやならぬ、大事くご守りませう、内證つき合ひ傍輩同士にや、狗と云ふとも腹立つな、主の爲めなら無間の底も、修羅も紅蓮も辭退せぬ、命限りに切り込む所存、是れが勇士の常の住、主心お婆々はごころにござる、氣海丹田の裏店かりて、氣海丹田はごころの程

ぞ、臍の辻から二町下、臍のぐるりに氣が聚まれば、とりもなほさず大還野よ、最もたふとや還丹の徳は、須彌も虚空も碎けて微塵、十方法界實相無相、見られてもなく見でもない、煩惱菩提のあともない、墮してくるしむ地獄もないが、往いて樂しむ淨土もないぞ、こゝに一期の大事がござる、眞正得悟の智識に逢はにや、世間多少の修業者ごもが、二三十年難行苦行、思ひはからずこの場に到りや、もはや悟つた大ひまあいた、おらはこれから心の儘ぢや、殺生偷盜も氣遣ひないぞ、五逆十惡好いなくさみや、因果むくひもないからと、邪見斷無の我儘悟り、よその見るめも恐ろしや、勵み求むる見性の法も、いまは地獄の種となる、もとの主心は皆な消えうせて、魔縁天狗が入りかはる、過去の因縁拙い故に、終に眞正の明師に逢はにや、悟後の修行の奥儀も知らぬ、もとの凡夫がいつそまし、今は澆末法滅の時、邪見邪法の起るも道理、支竺扶桑の三國ともに、眞の禪宗は地に落ちはて、殊にあやしき邪法がござる、曹洞黄檗濟家も共に、善知識ぢやと呼ばるゝわろも、人に對する説法を聞けば、眞正向上に

禪法といふは、坐禪觀法に用事もないが、佛經祖録も更／＼いらぬ、木地の儘なが眞の佛、佛求むれや佛にまよひ、法を求むれや法縛をうく、佛果菩提も夢中の夢よ、生死涅槃も飛ぶ鳥の跡、好きも悪きも皆な打ちすて、木地の白地で月日を送れ、障りや濁るぞ溪河の水、問ふな學ぶな手出をするな、是れがまことの禪法だ程に、見ぬが佛ぞ知らぬが神よ、是れをきくより彼の大勢の、無智や懶惰の役坐のやから、扱ても貴い教化でござる、もはや是れから我々ごもは、思ひよらざる生佛ぢやぞ、くふてはこして寝るばかりぢやと、並び睡るを脇より見れば、大勢並んで櫓を推すごとく、如何なり行く身のはてやらん、佛法破めつの大前表よ、悟後の修行とはどの様のことぞ、お婆々知つてならうたふてみやれ、是れは大事をお尋ねそふな、五百年來すたれた法ぢや、諸禪知識も知らぬが多い、悟後の大事は即ち菩提、昔春日の大神君の、解脱上人に御告げがござる、およそ俱盧孫佛より以來、たとひ天下の智者高僧も、菩提心なきや皆々魔道、菩提心とはどうした事ぞ、やまん婆女郎もうたふておいた、上求菩提

ど下化衆生なり、四弘の願輪に鞭打あて、人を助くる業をのみ、人を助くにや法
 施がをもちや、法施は萬行の上もりよ、有がたいぞや法施の徳は、たとひ佛口も盡され
 ぬ、法施するには見性がおもちや、見性ばかりぢやちぶさがほそい、細いちぶさぢや子
 は出来ぬ、よい子なければ跡絶る、隻手音聲もとめ得て置いて、此で休すりや斷見外
 道、次ぎに千重の荆棘叢を、残る事なく皆な透過せよ、お婆々死んでも何國へござる
 とめてたもれや帆かけ船、四十九曲り、細山路を、直ぐに通らにや一分たぬ、風の
 色香はごのよな物を、次ぎに夢中の祖師西來意、最後萬重の關鎖がござる、之れが禪
 者のむなぶく病ぞ、關鎖なければ禪宗は絶える、命がけても皆な透過せよ、むかし黃
 檠希運大禪師、常に嗟悼惜ませ給ふ、扱ても牛頭山宗融大師、常に横説豎説はすれ
 ど、未だ向上の關鎖をしらぬ、關鎖なければ禪ぢやない、鯉魚も龍門萬重を超える、野
 狐も稻荷の鳥居はこすぞ、流石禪宗のめしや食ひながら、關鎖とほらにや一分立たぬ、
 疎山壽塔に牛窓櫺、乾峰三種に犀牛の扇子、白雲未在に南泉遷化、倩女離魂に婆子燒

庵よ、是れぞ法窟の爪牙と名づけ、又は奪命の神符とも云ふ、此等逐一透過せよ、
 廣く内典外典を探り、無量の法財集めておいて、三つの根機を救はにやならぬ、三つ
 の根機の其中に、眞の種草を求むるがをも、眞の種草が眞實欲しか、法窟の牙と
 奪命の符と、鳥の兩羽を挟むが如く、是れが無ければ種草は出来ぬ、是れが即ち佛國
 の因、とりも直さず菩提の太行、たとひ虚空は盡きやると儘よ、こちの弘願は果てし
 やない、頼み入るぞよ千歳の後も、ひとりなりとも當家の種草、婆々が心を能く參究
 せば、祖師の眞風は地におちやせまい、油斷めさるなおまめでござれ、婆々は是れか
 ら御暇申す。

有がたいぞや天地の御恩

有がたいぞや、は希有なりぢや。本分上ぢや。希有とは、不可思議のことぢや。若しそつとでも分別にわたると、そりや希有が逃げて終ふ。遠而遠ぢや。本分の上からは分別沙汰は毫末も無い。併し、世間が分別ぢやによつて、よんどころ無く、兩邊にわたつて居るのみぢや。世間の儘に、兩邊の儘に、本分が湛然としてあるが看へるかの。昔、支那の白楊順和尚は、「心王銘」の中にある「水中鹽味色裏膠青決定是有不見其形」といふ語を見て、豁然と省みるところがあつたげな。

さア、そこで有がたいぞやを能く見ねばならぬ。冷暖自知せねばならぬ。骨を折らねばならぬ。差別の上から見ると、萬物と自己とはつきり分れて居るやうぢやが、更に其の分れぎはを徹見して見よ、本來、分つべきものが何處にあるか。天も蓋ふこと能はず地も載すること能はずぢや。それを自分勝手に天でも無いものを、天だと名付

けて天に蓋はれ、地でも無いものを、地だと名づけて地に載せられて居るのぢや。自分からつとめて種々と分別して迷つて居るとは、いやはや、おかしなもんぢやよ。

白山の無隠和尚は希有道人といつて居たさうぢやが、時代は違つても、矢張りこの有がたいぞやを看破つて、其儘自分の名にして居たものと見える。有がたいぞや、有がたいぞや、次ぎに天地の御恩とは仕うぢや。ハ、ハ、ハ、白隠和尚が慙う云ひながら、既に己れが天地と一體になりきつてゐる。——其處を御恩と云ふのである。

あつささむさの程までも

此の十一字の中で、ままでの三字が肝要ぢや。即ち、自己と天地萬物と不二一體の其儘が、自己と天地萬物と、散りくばらくぢや。ままでの三字ぢや。何も彼も二つ宛現はれて居る。あつさ、さむさ。夜と、晝と……。

夜と晝ともなうてはならぬ

即ち、裏と表と無うてはならぬ。他人と我れとも無うてはならぬ。若いと年寄と無うてはならぬ。粗ひと細いと無うてはならぬ。長いと短いと無うはてならぬ。美麗と醜汚と無うてはならぬ。

ひるははたらく夜ら休む

お腹が減つたら食はねばならぬ。減つた儘では居られない。其處で、たれたら食へな食つらたれぬ。誰れもゑんぞう三昧にぢや。本來は何時も眞裸體ぢや。裸體で居れば風邪をひく、何處も路だと進んで行けば、山もござれば川もある。そこで、咲いた花なら散らさばならぬ。逢ふた仲なら別れにやならぬ。晝ははたらけ夜ら休めぢや。我れと他人とも其通りぢや。助けられたり助けたり。餘るものなら施してやれ。

雨露の御恩で五穀もみのる

助けられたり助けたり、共に樂み、共に苦しみ、自他圓融して礙りたく、事々物々

宛然、球の盤を走るが如く、凡ゆるものに應現して行くと、一家齋ひ萬國治まる。枝も榮えりや葉も茂るぢや。

するの野山の草木まで

寸土尺地と雖も、御恩の到らぬくまはないぞ。

君の御恩は山より高い、賤がわらやのはてまでも

さア、君の御恩とは仕うちや。自分の御恩で御座るわい。山より高く海より深いのは當然ぢや。賤の藁屋の果てまでも、さては、末の末の末までも、上は三十三天非々相天のはてより、下は水際金輪奈落のどん底までも、縦横十方法界に充滿した御恩で御座る。其處で本分を看破らねば、駄目ぢやぞや。

繁昌めされよ萬代までも

本分が、わかつたら、行住不斷の正念相續が、とりも直さず繁昌よ。な、さうぢ

や無いかい。萬代までもは、盡形壽命盡未來際までもちや。

風に草木のなびく様に、わすれまいぞや御主の御恩

御主の御恩は、自分の御恩ぢや。「暫時不在如同死人」。僅かでも、お留守になると、

はや千里萬里ぢや。二十四時中無空缺之處、謂之性地明白。」

遠きあの世の後までも

遠きあの世は、近き脚下ぢや。即今ぢや。

親の御恩は海より深い

海より深いが、山よりも高いぞ。

恩を知らぬは犬猫ぢや

本分は、ちやんと知つて居る、知らぬは本分をくらまして居るからぢや。白隠和尚

は恩を知らぬは犬猫ぢやと云ふて御座るが、畜生とても恩を知らぬは無いぞ。本分はちやんと知つて居るのだけれど氣が付かぬ、自分で自ら畜生におちて居るのぢやわい。

孝行するほご子孫も繁昌

親から子、子から孫、孫から曾孫と、何處までも續かぬは無い。

親はうき世の福田ぢや

丁度、穀物の種を蒔くやうぢや。春種を蒔くと秋に實る。秋の實を採つて又た春になる種を蒔く。何時までもそれを怠らなければ、生育せぬは無い。これを福田といふぞ。

心短機な殿子の癖に、主の専途にや遁げはしる

心短機なは、心とぼしい事ぢや。心が貧乏なことぢや。男のくせに、そんな事では

立てやう筈がないぞ。一體、本來からすると、誰れも彼れも富貴ぢやのに、自らつとめて貧乏するのぢや。…さア其んな風ぢやから主人公の、自分の一大事に際しては、遁げるより外に途はあるまいよ。富貴だの貧乏だの敵だの味方だのと見るのは皆な自分がつくつて見るのぢや。本來は自他平等ぢやのに、自他背馳するとは何んといふうゝたへ者ぢや。そんな貧乏人だから背馳することを本分かと思つてる。始めから間違ひだらけぢや。大阪の蛙が、江戸見物に出かけ、箱根山の上に立つて遠くを眺め「何んのことだ江戸も大阪も變りはない」と云つて引返したが、其實、蛙には後に玉目があるので、矢張、大阪を見て居たのだといふ話がある。心の貧乏人と同じこつちやわい。

忠といふ字を能く見れば、外へちらさぬ此心

真中に居て、左にも右にも片寄らず、即ち、一方に逼せぬところが忠の字ぢや。此

處を能く見よ。此處を能く見ると、成程、忠といふ字は、外へ散らさぬ、即ち、散亂心にならぬことが、判然と會得し得られやう。忠は孔子の謂ゆる忠恕の忠ぢや。己の心にあたるのぢや。矢を射て、ひたご的中するところぢや。己れが熱い時に熱いと知り己れが冷い時に冷いと知る。眠い時に眠いと知り、腹が減つた時に減つたと知る。即ち、己れの心にあたるのぢや。忠ぢや。既に、自分が其れならば、人に對しても己れの如くせよ。「以己及物、推己及物」。己れが熱ければ人も熱い、己れが寒むければ人も寒いに決つて居る。それ故に、己れの欲せざるころを人に施すこと勿れとある。夫子の道は、「忠恕一以貫之」ぢや。忠恕の二字は止至善の場ぞ。

偕て、忠は散亂心にならぬ事だから、忠が其儘行くと定地である。それが他には、いと欲界の散地ぢや。欲界、色界、無色界、其中で、定地は無色界であるが、こんな順序は學ぶところでは無い。併し如來が入涅槃の相を示された時は、四禪から般涅槃したまふた。釋迦譜要略といふ書に、

「雙卷大般泥洹經云、佛告阿難、已願樂如來正化、當棄貪慾憍慢之心、遵承佛教、以精進受、思惟道行、是為最後佛之遺令、必共慎之、汝諸比丘觀佛之儀容、難可得觀、却後一億四千餘歲、乃當復有彌勒佛耳、難常遇也、天下有優曇華、不華而實、若其生華、則世有佛為世間曰、恒除衆眼、自我為聖師、至七十九、所應作者、亦已究暢、汝其勉之、夜已半矣、是故比丘無為放逸、我以不放逸、故自致正覺、無量衆善亦由不放逸得、一切萬物無常存者、此是如來末後所說、於是世尊即入初禪、從初禪起入第二禪、從第二禪起入第三禪、從第三禪起入第四禪、從第四禪起入空處定、從空處定起入識處定、從識處定起入不用定、從不用定起入有想無想定、從有想無想定起入滅想定、是時阿難問阿那律、世尊已般涅槃耶、阿那律言未也、阿難世尊今在滅想定、我昔親從佛聞、從四禪起乃般涅槃、時世尊從滅想定起入有想無想定、從有想無想定起入不用定、從不用定起入識處定、從識處定起入空處定、從空處定起入第四禪、從第

四禪起入第二禪、從第二禪起入第一禪、從第一禪起入第二禪、從第二禪起入第三禪、從第三禪起入第四禪、從第四禪起佛般涅槃、』

とある。此處で眼が開かねば駄目ぢやぞ。盡法界寸土尺地悉く涅槃ぢやないか。素人ならば息切れるところぢやが、如來の見事なる超越三昧を見よ。順逆三昧を見よ。……忠といふ字を能く見れば外へ散らさぬ此心ぢや。

五尺餘のからだは持て、主心なければ小童ぢや

身體は什麼に大きくも、主心の本分に居ないと付もならぬぢや。小童とは、もの、數にならぬことぞ。

武藝武術も第二のさたよ

主心お婆々粉引歌

どんな軍艦でも、大砲でも、鐵砲でも、弓でも、槍でも、それや次ぎの事よ。國を
守るのも、世間の平和を保つのも、皆な悉く第二の事ぢや。誰れやらは此處を旨く言
つて居る。

行いて見よ今ま鎌倉は麥畑
夏草やつはもの共が夢の跡

何うちやい、あれだけの大騒動をやつて、鎌倉に幕府を開いたはよいが、行いて見
よ、今ま鎌倉は麥畑ぢや、ものゝふ共の夢の跡ぢや。由井が濱邊の波の音が笑つて居
るぞ。然らば第一の事は何んぢや、天邊のギリ／＼巻は何うちや。中心點は何處にあ
るぞ。

ごかく主心がおもぢやもの

本分が即ち第一ぢや、主心が即ち第一ぢや。中心點ぢや。本分に居さへすれば、軍

艦も大砲も警察も不用となるのである。若しも本分から一足でも踏みはづしたら何
ぢや。このうろたへ者奴がツ。蜂の巢悟りで、穴だらけぢやわい。へこたれ者共奴。
ワツハ、、、。

主心なければ明屋も同じ、狐狸も入りかはる

そりや、白隠和尚も、主心がないと明屋同然ぢやと云ふて御座る。蜂の巢のやうに
穴だらけ、狐狸が入りかはるぢや。裁判所だらけぢや。警察だらけぢや。

周の文武の大公望が、云ふておかれた名言がござる、武家の
大事の三略の書に

太公望は周の時代の參謀總長ぢや。其の太公望が曾て云ふて置いた言葉が六韜三略
といふ兵書の中にある。即ち